

2025(令和7)年の わが国周辺の漁海況の特徴について

目 次

要約－2025年のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	8
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ	11
(2)サンマ	12
(3)カツオ・ビンナガ	14
(4)スルメイカ・アカイカ	15
4. トピックス(黒潮大蛇行終息とその影響)	18

2026年1月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2025年のポイント

● 総括

- ・2017年8月に始まった黒潮大蛇行が2025年4月に終息した。これに先立ち黒潮続流の顕著な北偏も解消し、常磐～道東の多くの海域では水温が低下した。他方、夏季は猛暑が続き、日本周辺の海面水温は、ほぼ全域で近年(2011～2020年)より高めであった。
- ・全国主要港(108港)における2025年の水揚量は、前年比94%の162万トン、平均価格は前年比101%の256円/kgであった。水揚量の減少などにより、2010年以降で最も魚価が高かった前年並みの高値となつた。
- ・全体としては、日本近海の主要魚介類の水揚量の減少傾向が継続した一方、サンマは海況の変化に伴い常磐～道東に来遊したことにより、また、スルメイカは冬季発生系群の資源量増加により、それぞれ水揚量が前年を上回つた。
- ・黒潮大蛇行の終息等の海洋環境変化の影響が考えられるものとして、太平洋側におけるマイワシの漁獲量が道東で減少し、銚子近海で増加したことが挙げられる。他方、太平洋側のマサバや、東北海域におけるカツオの不漁は、海況変化よりも資源減少の影響が大きかったと考えられる。

● わが国周辺の海況

- ・黒潮域では、4月に7年9ヶ月におよぶ黒潮大蛇行が終息した。また、黒潮続流の北偏は前年末に終息して三陸～道東の著しい高水温は解消した。
- ・他方、夏～初秋の海面水温は、記録な猛暑の影響で、全域で近年より高めであった。
- ・日本海の海面水温は、冬季～春季には北部は近年より高め、南部は低めであったが、秋季には北部でも低めの海域もあらわれた。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・全国主要港における2025年の調査対象全魚種の水揚量は、前年比94%の161.6万トン、平均価格は前年比101%の256円/kgであった。
- ・水揚量は2010年以降で最低水準、平均価格は水揚量の減少等により最高価格で、魚価の高止まり傾向が続いた。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における2025年の水揚量は55.8万トン(太平洋側46.8万トン、東シナ海・日本海側9.0万トン)で、前年(58万トン)を約2万トン下回つた。価格は全体として前年・前々年を下回つた。
- ・太平洋側では銚子港に1～8月にまとまつた水揚げが継続し、前年を約7.2万トン上回る19.3万トンが水揚げされた。一方、道東のまき網漁獲量は15.6万トンで、前年(20.6万トン)を下回つた。これらの要因として、黒潮大蛇行と黒潮続流の北偏が解消し、常磐～三陸海域の春季水温が低下した結果、過去2年間にみられたような北上回遊の早期化が抑制されたことなどが考えられる。
- ・日本海側では3～5月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港の水揚量は5.1万トンと前年(5.3万トン)並みであった。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における 2025 年の水揚量は 22.0 万トンで、前年(21.6 万トン)並みであった。
- ・太平洋側の水揚量は 4.1 万トンで、過去 2 年間に南下回遊の妨げとなっていた黒潮続流の北偏が解消されたものの、資源量減少の影響等により、前年(6.4 万トン)を下回った。
- ・東シナ海・日本海側の水揚量は 17.9 万トンで、対馬海域を中心に好漁が続いた。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における 2025 年の水揚量は 5.5 万トン(太平洋側 0.6 万トン、東シナ海・日本海側 4.9 万トン)で、前年(6.3 万トン)を下回った。

● サンマ

- ・サンマの全国主要港における 2025 年の水揚量は 6.4 万トンで、前年(3.7 万トン)を上回ったものの、近年では最も水揚量が多くかった 2008 年(約 34.3 万トン)の 18%であった。
- ・8 月の主漁場は公海で、前年よりも遠かったものの、海況の変化に伴い魚群の南下は早く、8 月下旬には道東海域、10 月には三陸～常磐海域で安定した漁場が形成された。
- ・近年としては水揚量が多くなったこと、漁期前半に大型のサンマが出現したこと、道東～常磐海域に魚群が来遊して多くの小型船が操業できたことなど、明るい材料があった年となった。

● カツオ

- ・全国の釣りによる生鮮カツオの 2025 年の水揚量は 1.6 万トンで、前年(3.7 万トン)の 44%、過去 4 年平均(3.4 万トン)の 47%であった。特に、例年、主漁場となる東北海域で著しい不漁となり、宮城県気仙沼港では豊漁だった前年比 18%となった。
- ・まき網による生鮮カツオの水揚量は 0.8 万トンで、前年(12.2 万トン)の 7%、過去 4 年平均(12.7 万トン)の 6%であった。
- ・全体的な不漁の要因として、2025 年は日本近海へのカツオの来遊量が年間を通して少なく、特に夏～秋に東北海域に北上する小型(2～3kg 程度)の群れの南方からの来遊がほとんどなかったことが考えられる。

● ピンナガ

- ・全国の生鮮ピンナガの 2025 年の水揚量は 2.0 万トンで、前年(1.6 万トン)の 132%、過去 4 年平均(1.9 万トン)の 112%であった。
- ・5 月中旬から 7 月上旬に銚子沖でピンナガの活況が継続し、中型竿釣りによるまとまった漁獲によって全国の水揚量が増加した。

● スルメイカ

- ・全国主要港における生鮮スルメイカの 2025 年の水揚量は 1.8 万トンで、前年の 1.3 万トンおよび 2021～2024 年平均(1.4 万トン)を上回った。これは、冬季発生系群の資源量が多かったことによるとされている。
- ・海域別水揚量は、青森太平洋側(昼釣り・底曳網主体)、三陸(底曳網主体)、福島～愛媛で前年を上回り、他海域で前年並み～下回った。

・冷凍スルメイカの水揚量は 1.6 千トンで、前年(1.1 千トン)を上回り、2021～2024 年の平均 (3.6 千トン)を大きく下回った。漁場は日本海にはほとんど形成されず、7～12 月の三陸～青森太平洋側に形成された。

● アカイカ

- ・2025 年のアカイカ夏漁(5～9 月)の水揚量は 5.7 千トンで、前年および過去 4 年平均を大きく上回る豊漁となった。
- ・出漁隻数は 31 隻で、日本海のスルメイカ不漁を背景に増加した。また、1 日 1 隻当たり漁獲量(CPUE)も 2011 年以降で最も高い水準となった。
- ・平均価格は 757 円/kg と前年(718 円/kg)並みで、総水揚金額は 43.1 億円と前年の 1.5 倍に達した。

1. わが国周辺の海況

2017年8月に始まり、観測史上最長の7年9ヶ月続いた黒潮大蛇行は4月に終息した。黒潮大蛇行解消に先立ち、黒潮続流の北偏も解消して三陸～道東の高水温も解消に向かった。夏季は猛暑が続き、海面水温もほぼ全域で近年(2011～2020年)より高めの状態が続いたが、秋季以降、高水温は解消傾向になった。

(1)冬季(1～3月)

1)黒潮域

黒潮は大蛇行が続いたが、不安定であった。

・黒潮流路

黒潮流路(図1-1)は、四国沖では離岸する事が多かつたが比較的安定していた。一方、蛇行部は変動が大きく、冬季前半は 29°N 以南まで南下したが、後半は蛇行部の切り離しと再結合が繰り返され、不安定であった。

・海面水温

四国海域(図1-2①)は、黒潮流軸が離岸した影響で、おおむね近年より低め(図5-①)であった。遠州灘～熊野灘(東海)海域(図1-2②)の海面水温は、黒潮流軸の通過や遠州灘沖の黒潮屈曲部から暖水波及の影響で、おおむね近年より高めであった(図5-②)。伊豆諸島南部(図1-2③)は風が強かった影響でおおむね平年並みに推移した。沖縄東沖～本州南方沖(図1-2B)や関東南東沖(図1-2A)は、風が強かった影響で近年より低め海域もみられた。

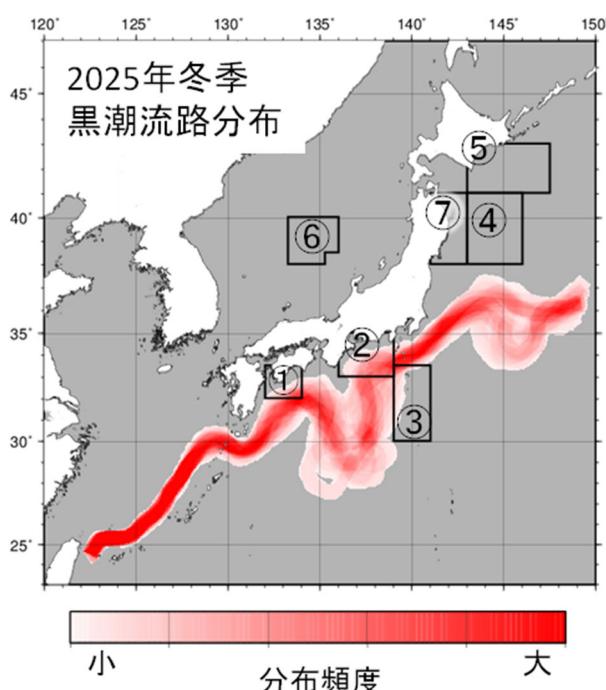


図1-1. 2025年冬季(1～3月)の黒潮流路分布(海上保安庁海洋情報部の海流 GIS データを使用)
黒枠①～⑦は図5の①～⑦の海域に対応

2)親潮域・混合域

2024年12月に黒潮続流の最北上部(岸側の峰)が切り離され暖水渦となり、北偏は解消した。

・黒潮続流

黒潮続流(図1-1)は、最北上部(峰)が前年12月に切離され、最北上部は一時的に黒潮大蛇行開始前の緯度に近い 36°N 付近まで南下した。常磐～三陸沖には、最北上部の切り離しにより形成された巨大な暖水渦が停滞した。

・親潮

親潮の面積(100m深で 5°C 以下)は、2月以降急速に拡大し、親潮第一分枝は三陸沖まで南下したが、平年並みまでは至らず、親潮面積は平年より小さめの状態が続いた。

・海面水温

三陸沖海域(図1-2④)と三陸沿岸海域(図1-2⑦)および道東海域(図1-2⑤)は、黒潮続流から切り離された暖水渦の影響で、冬季前半は近年より高めの状態が続き、特に三陸沖合海域は $3\sim 5^{\circ}\text{C}$ 高めであった。しかし、冬季後半は親潮の拡大とともに、高水温は徐々に解消した。常磐海域(図1-2C)は、暖水渦や暖水渦から波及する暖水の影響で、おおむね近年より高めであった。

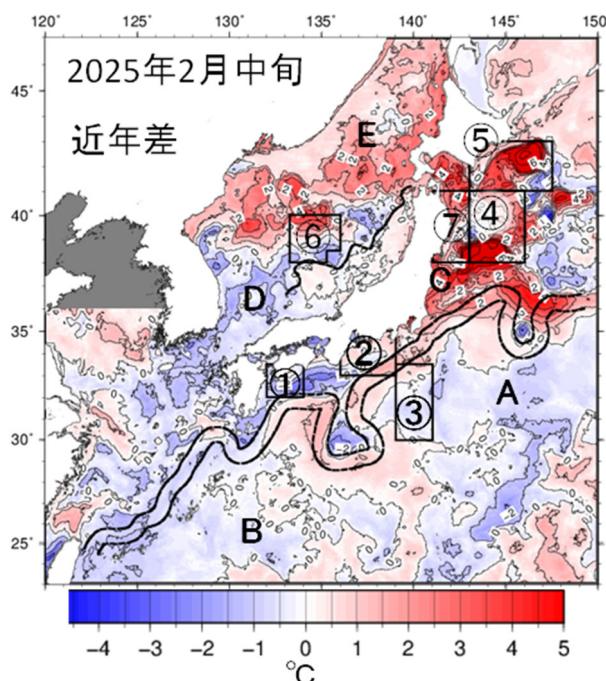


図1-2. 2025年2月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

3)日本海

対馬暖流の勢力は、冬季前半は平年より強めであったが、後半は平年より弱めの時期もみられた。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、冬季前半は平年より強め～かなり強めであったが徐々に縮小し、冬季後半～春季前半は平年より弱めの期間が多くあった。春季後半には平年より強めに回復した。対馬暖流の流路は、冬季～春季前半は大和堆南沖を通過し、能登半島沖で蛇行して離岸し、東北でやや接岸した(図1-2)。春季後半は全般的に接岸が進んだ。

・海面水温

北部(図1-2E)は近年より高め、南部(図1-2D)は低めであった。大和堆海域の海面水温(図1-2⑥)は、冬季は対馬暖流の勢力縮小とともに近年差が縮小したが、3月には北部で近年より高めの海域が拡大し、近年差は拡大した(図5-⑥)。

(2)春季(4~6月)

1)黒潮流域

黒潮流路は、変動が大きく、4月下旬に蛇行部が切り離されて直進流路になり、黒潮大蛇行は終息した。

・黒潮流路

変動が大きかった(図2-1)。4月下旬に潮岬沖で黒潮流軸から蛇行部全体が切離されて巨大な冷水渦を生じ、直進流路となつたが、非大蛇行接岸(N型)流路とは異なり、四国～潮岬沖では離岸が続いた。5月に四国沖で発生した小蛇行は発達しながら東進し、6月には四国～潮岬で黒潮流軸が接岸し、遠州灘沖で蛇行して伊豆諸島西を北上するB型になつた。

・海面水温

6月は、気温が6月としては過去最高を記録した事もあり、各海域共に海面水温も急上昇した。

四国海域(図2-2①)は、春期前半は黒潮流軸の離岸が続き、近年より低めであったが、後半は黒潮流軸が接岸傾向になり、近年より高めになった(図5-①)。遠州灘～熊野灘(東海)海域(図2-2②)は黒潮流路の接岸により、海面水温はおおむね近年より高めであった(図5-②)。伊豆諸島南部(図2-2③)の海面水温は、春季前半は、おおむね近年並であったが、6月以降は気温が高かった影響もあり昇温が進んだ(図5-③)。沖縄東沖～本州南方沖(図2-2B)や関東南東沖(図2-2A)の海面水温も、伊豆諸島南部同様に冬季～春季前半は風が強く、近年より低めの海域が多かつたが、5月以降は近年より高めの海域が拡大した。

2)親潮域・混合域

黒潮続流から切り離された暖水渦は縮小しながら三陸沖まで北上し、親潮の面積は平年並みに回復した。

・黒潮続流

黒潮続流(図2-1)は、最北上部が徐々に北上し、一時的に38°N付近まで北上した。

・親潮

親潮の面積は、春季前半は拡大が続き、4月には平年(1993～2017年の平均)並まで回復した。親潮第一分枝の南端も、黒潮続流の北偏が解消した影響もあって、春季前半には三陸南部～常磐北部付近に達した。しかし、6月には親潮の面積は急速に縮小し始め、平年よりかなり小さめになった。

・海面水温

三陸沖海域(図2-2④)と三陸沿岸海域(図2-2⑦)は、春季前半には三陸沿岸では近年より低め

の海域もみられた。6月は親潮面積が縮小し気温も高かった影響で昇温が進み、近年差が急激に拡大した(図5-④、図5-⑦)。

道東海域(図2-2⑤)は、親潮面積の拡大にともない近年並となった。6月は三陸海域同様に、近年差は急激に拡大した(図5-⑤)。

常磐海域(図2-2C)は、親潮系水の南下の影響で、近年より低めの海域がみられた。

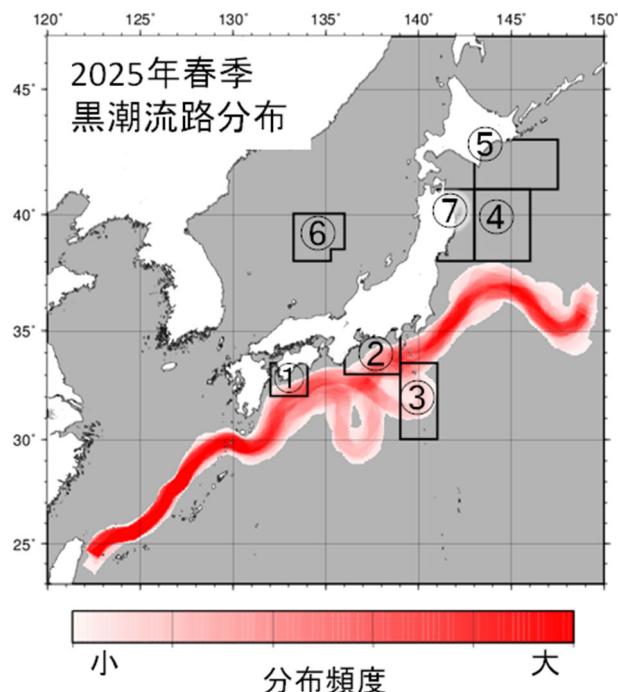


図2-1. 2025年春季(4~6月)の黒潮流路分布

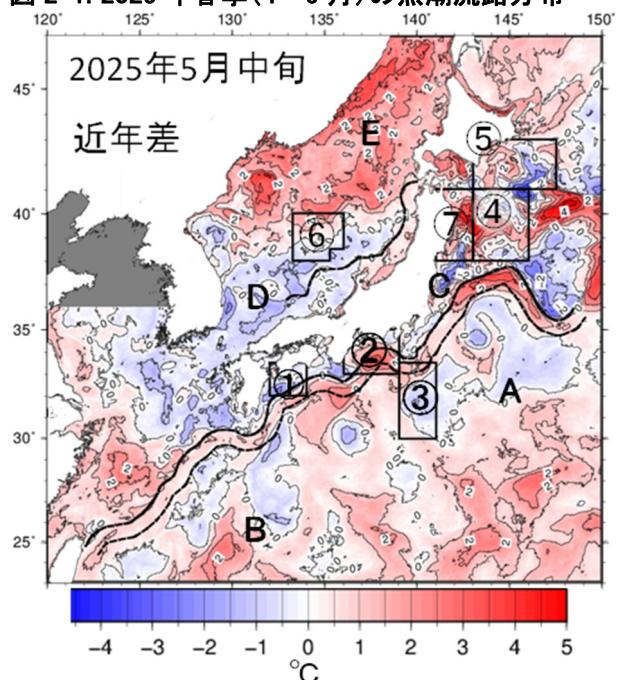


図2-2. 2025年5月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

3)日本海

対馬暖流の勢力は徐々に回復し、海面水温は、北部は近年より高め、南部は低めであった。

・対馬暖流

春季前半は平年より弱めの期間が多かったが、後半には平年より強めに回復した。対馬暖流の流路は、春季前半は大和堆南沖を通過し、能登半島沖で蛇行して離岸し、東北でやや接岸した(図 2-2)。春季後半は全般的に接岸が進んだ。

・海面水温

日本海北部(図 2-2E)は高め、日本海南部(図 2-2D)は低めの傾向が続いた。

大和堆海域(図 2-2⑥)は、対馬暖流の勢力が縮小した影響で徐々に近年差が縮小した。6月に入ると、気温の記録的高温の影響で海面水温が近年より低めの海域が縮小し、大和堆海域でも近年差が拡大した(図 5-⑥)。

(3) 夏季(7~9月)

1) 黒潮流域

黒潮は、C型流路で推移し、九州～四国沖では一時的に小蛇行が発生した。

・黒潮流路

黒潮流路(図 3-1)は、遠州灘沖で蛇行する C型で推移し、4月に黒潮流軸から蛇行部が切り離された冷水渦が西進し、7月に九州南東沖で黒潮流軸と結合した。この冷水渦の結合により、九州～四国沖で小蛇行が発生した。この小蛇行は縮小しながら東進し、8月に遠州灘沖の蛇行と結合した。

・海面水温

記録的に気温が高かった影響で、近年より高めであったが、台風通過により降温した海域もみられた。

四国海域(図 3-2①)や遠州灘～熊野灘(東海)海域(図 3-2②)および伊豆諸島南部(図 3-2③)の海面水温は、気温が高く日射量も多かった影響で、近年より高めの期間が多かったが、8月は台風通過の影響や黒潮流内側域で冷水域が発達した影響で近年差が縮小した。

沖縄東沖～本州南方沖(図 3-2B)や関東南東沖(図 3-2A)の海面水温は、台風通過により一時的に近年より低めになることもあった

2) 親潮域・混合域

黒潮続流の最北上部は 37°N 付近で推移し、親潮の面積は、縮小した状態が続いた。

・黒潮続流

黒潮続流は(図 3-1)の最北上部はやや南下して 37°N 付近で推移した。

・親潮

親潮の面積は期間を通して平年よりかなり小さい状態であったが、縮小は止まった。

・海面水温

三陸沖海域(図 3-2④)と三陸沿岸海域(図 3-2⑦)の海面水温は、記録的に気温が高かった影響と、暖水渦や黒潮続流からの暖水波及の影響で期間を通して近年より高めであった(図 5-④、図 5-⑦)。道東海域(図 3-2⑤)は 8 月までは三陸同様に

近年より高めであったが、9月は親潮系冷水が現れ始め、近年より低めに転じた。

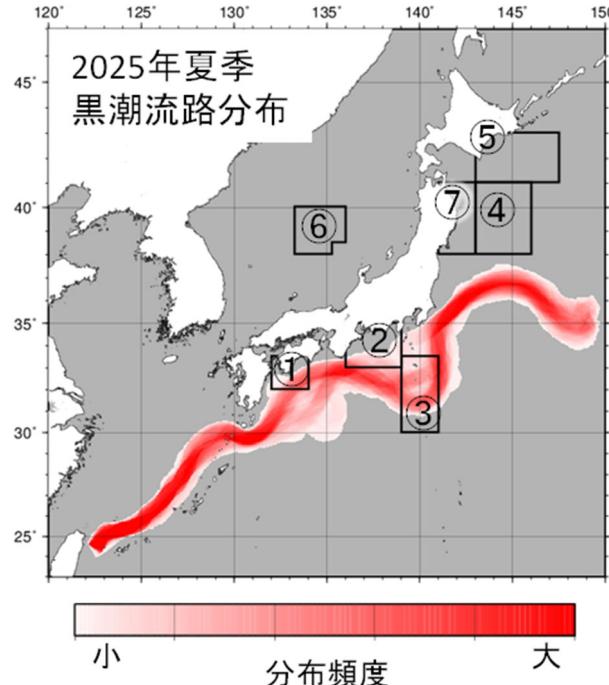


図 3-1. 2025 年夏季(7~9 月)の黒潮流路分布

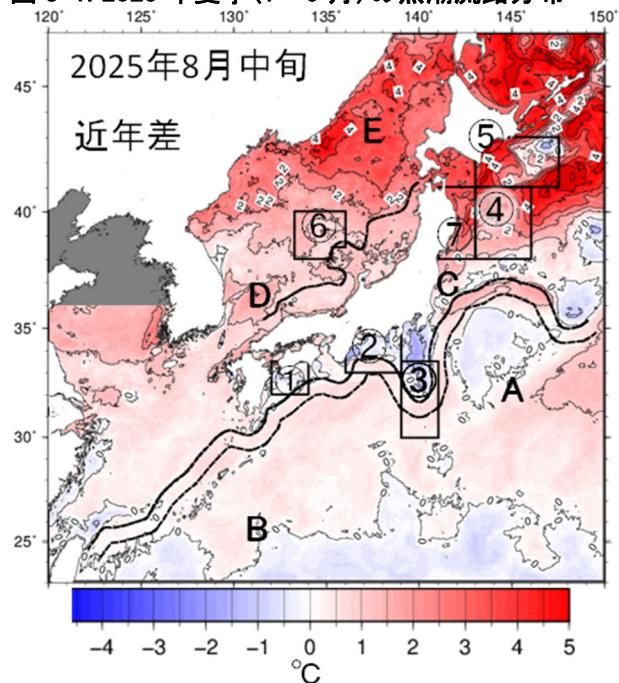


図 3-2. 2025 年 8 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

3) 日本海

対馬暖流の勢力は徐々に弱まったが、海面水温はほぼ全域で近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は徐々に弱まり、9月は平年よりやや弱めになった。対馬暖流の流路は山陰では徐々に接岸し、能登半島以北は離岸傾向であった。

・海面水温

台風の通過が無く、気温が記録的に高かった影響で昇温が進んで、ほぼ全域で近年より高めであつ

た。特に北部(図 3-2E)では広範囲で 2~4°C 高めであったが、8 月は低気圧や前線の影響で一時的に近年差は縮小した。

(4) 秋季(10~12 月)

1) 黒潮域

黒潮は 11 月上旬までは C 型流路で推移したが、11 月中旬以降は B 型流路になった。

・黒潮流路

黒潮流路(図 4-1)は 11 月上旬までは蛇行の最南下部が 32° N 付近まで南下する安定した C 型で推移したが、11 月中旬以降は蛇行が縮小して B 型に移行した。

・海面水温

10 月までは西日本を中心に気温が高く、四国海域(図 4-2①)や遠州灘～熊野灘(東海)海域(図 4-2②)および伊豆諸島南部(図 4-2③)は、近年より高めであった(図 5-①、図 5-②、図 5-③)。11 月以降は、近年差は縮小傾向になり、遠州灘～熊野灘(東海)海域は黒潮内側部に冷水域が発達して近年より低めに転じた(図 5-②)。

沖縄東沖～本州南方沖(図 4-2B)や関東南東沖(図 4-2A)の海面水温は引き続き近年より高めであったが、11 月以降は近年より高めの海域は縮小した。

2) 親潮域・混合域

黒潮続流の最北上部は 38° N 付近までやや北上し、親潮は緩やかに拡大し始めた。

・黒潮続流

黒潮続流(図 4-1)の最北上部は安定し、38° N 付近までやや北上した。一方、145° E 以東は変動が大きく、11 月下旬に南下部が切り離されて冷水渦を生じた。

・親潮

親潮の面積は、秋季前半は緩やかに縮小し、平年よりかなり小さめであったが、後半は緩やかに拡大し平年より小さめになった。親潮第一分枝は一時的に道東沖まで東進したが、12 月以降は暖水渦の北上により後退した。

・海面水温

2024 年 12 月に黒潮続流から切り離された暖水渦は三陸北部まで北上し、黒潮続流からの暖水や津軽暖流系水と一体化して不明瞭になった。

三陸沖海域(図 4-2④)は、黒潮続流からの暖水波及の影響で近年より高めの状態が続いたが、秋季後半は気温の低下とともに近年差は縮小した(図 5-④)。三陸沿岸海域(図 4-2⑦)と道東海域(図 4-2⑤)は、秋季前半は近年より高めであったが、後半は親潮面積の拡大とともに、近年より低めになった(図 5-⑤、図 5-⑦)。

常磐海域(図 2-2C)の海面水温は、黒潮続流からの暖水波及の影響で、おおむね近年より高めであったが、秋季後半は常磐北部沖では親潮系冷水の影響で近年より低めの海域もみられた。

3) 日本海

対馬暖流の勢力はかなり強めで、海面水温は沖合や朝鮮半島沖を中心に近年より高めであった。

・対馬暖流

対馬暖流の勢力は、急速に強まり平年よりかなり強めで推移した。対馬暖流の流路(図 4-2)は山陰西部では接岸し、能登半島以北は離岸した。

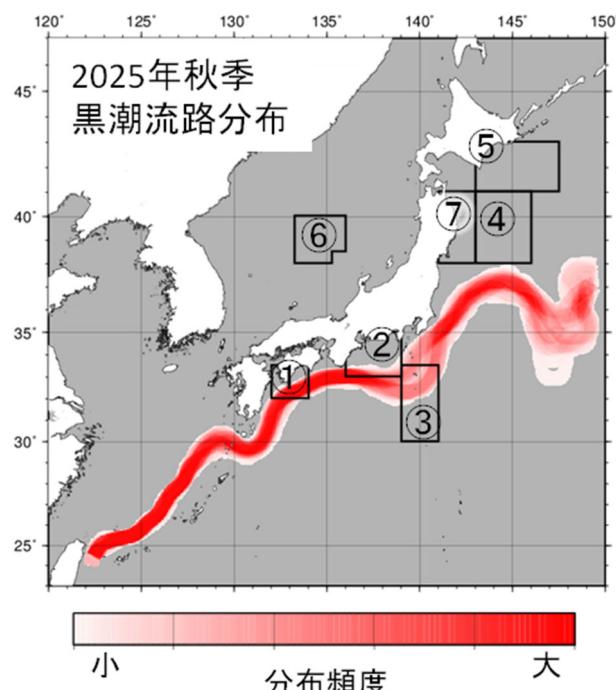


図 4-1. 2025 年秋季(10~12 月)の黒潮流路分布

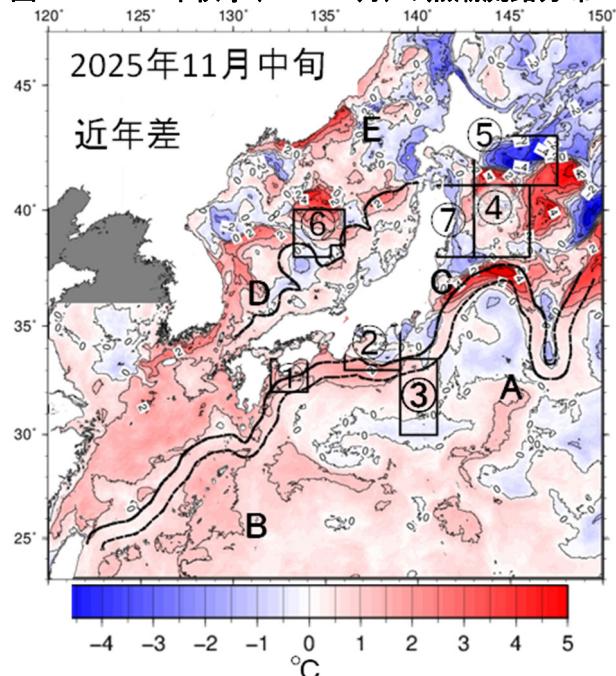


図 4-2. 2025 年 11 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

・海面水温

大和堆海域(図 4-2⑥)は、期間を通して近年より高めであったが、11 月以降は気温の低下とともに近

年差は縮小した(図 5-⑥)。朝鮮半島周辺(図 4-2D))は、朝鮮半島南部～中部では東朝鮮暖流の影響で近年より高めであったが、同半島中部で東朝鮮暖流が離岸したため、同半島北部は近年より低めで推移した。日本海北部(図 4-2E)は、北海道側は近年より低め、大陸側は高めで推移した。

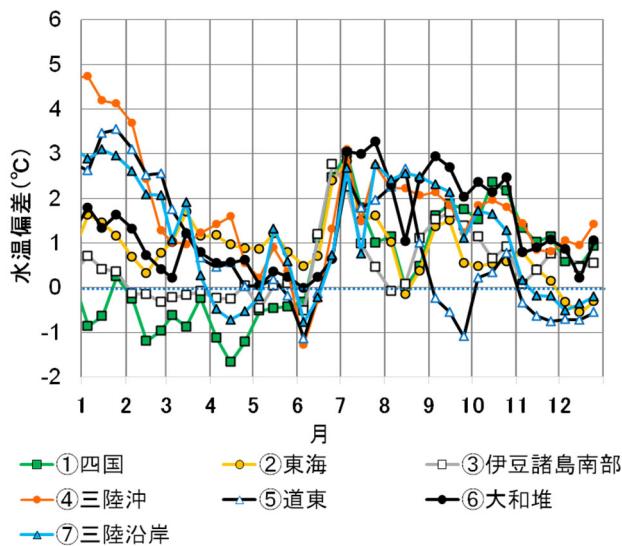


図 5. 2025 年における海域毎の海面水温の近年差の推移 海域①～⑦の位置は図 1 を参照

(海洋事業部 矢野泰隆)

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

(1) 主要港における主要魚種の動向

JAFIC 調査港における 2025 年の調査対象全魚種の累計水揚量は 161.6 万トンで、2024 年(172.7 万トン)の 94% と前年をやや下回り(表 1)、調査を開始した 2010 年以降で最低水準であった。平均価格は 256 円/kg で、2024 年(252 円/kg)の 101% と前年並み(増減率 5% 以下)で、2010 年以降で最高価格であった。なお、本報告の水揚量と価格は、JAFIC「おさかなひろば」によるものであり、2025 年 12 月は速報値である。

表 1. JAFIC 調査港の 2025 年の月別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較

月	2025年		2024年		前年対比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
1	128,939	205	115,971	255	111%	80%
2	104,166	235	113,315	231	92%	102%
3	125,178	211	116,989	227	107%	93%
4	148,668	211	165,351	192	90%	110%
5	161,065	215	119,629	239	135%	90%
6	165,159	228	185,541	206	89%	111%
7	167,645	232	175,634	186	95%	125%
8	103,763	294	111,314	263	93%	112%
9	205,963	258	184,298	287	112%	90%
10	145,443	343	187,021	359	78%	96%
11	103,930	366	115,318	335	90%	109%
12	56,412	388	137,564	250	41%	155%
合計	1,616,331	256	1,727,946	252	94%	101%

(2) 主要 49 魚種の水揚量と平均価格

主要 49 魚種の 2025 年の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年と比較した(表 2、図 6)。

水揚量は、ビンナガ、サンマ、生鮮スルメイカなど 13 魚種が前年を上回り、さば類、かれい類など 9 魚種は前年並み、カタクチイワシ、生鮮カツオ、アキサケなど 27 魚種は前年を下回った。平均価格は、ホッケ、ヤリイカ、ハマチ(養殖)など 24 魚種が前年を上回り、ニシン、冷凍キハダ、たこ類など 12 魚種は前年並み、マイワシ、生鮮キハダ、冷凍スルメイカなど 13 魚種は前年を下回った。

表 2. JAFIC 調査港における 2025 年の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較(2024 年の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	1～12月					
	2025年		2024年		前年比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
スケトウダラ	85,380	61	81,883	55	104%	110%
マイワシ	558,356	51	580,406	70	96%	72%
カタクチイワシ	5,104	40	14,038	79	36%	51%
ウルメイワシ	27,686	70	38,006	86	73%	81%
ニシン	4,326	95	6,142	94	70%	100%
さば類	220,228	150	216,325	137	102%	110%
ホッケ	7,374	265	14,202	157	52%	169%
ほたてがい殻付	48,396	315	59,860	196	81%	161%
マアジ	55,149	266	63,213	251	87%	106%
マダラ	30,097	278	32,013	252	94%	110%
冷カツオ	158,545	271	174,848	254	91%	107%
かれい類	10,420	268	10,090	294	103%	91%
ブリ	31,955	368	31,604	312	101%	118%
生カツオ	19,539	561	53,050	334	37%	168%
冷キハダ	24,505	432	29,663	419	83%	103%
ビンナガ	20,822	448	15,774	439	132%	102%
サンマ	64,368	337	37,219	462	173%	73%
マカジキ	409	791	578	680	71%	116%
マダイ(天然)	3,260	698	3,579	680	91%	103%
さわら類	1,613	809	2,923	703	55%	115%
ヒラマサ	828	887	963	712	86%	125%
ギンザケ(養殖)	10,555	907	8,535	814	124%	111%
生スルメイカ	17,620	727	13,023	818	135%	89%
ヤリイカ	1,998	1,008	2,775	826	72%	122%
冷メバチ	15,371	916	17,303	851	89%	108%
生キハダ	11,803	821	8,476	942	139%	87%
ヒラメ(天然)	1,661	982	1,706	944	97%	104%
たこ類	5,028	994	6,955	994	72%	100%
アキサケ	14,434	1,566	44,238	1,025	33%	153%
あなご類	587	1,005	674	1,051	87%	96%
ザザエ	173	1,189	297	1,069	58%	111%
メジマグロ(ヨコワ)	542	1,042	431	1,076	126%	97%
ハマチ(養殖)	806	1,419	510	1,086	158%	131%
生メバチ	3,598	1,224	4,544	1,086	79%	113%
マダイ(養殖)	198	1,136	162	1,127	122%	101%
メカジキ	2,216	1,330	2,466	1,218	90%	109%
冷ミナミマグロ	5,508	1,854	5,453	1,654	101%	112%
冷スルメイカ	1,609	1,264	1,084	1,703	148%	74%
キンメダイ	1,808	1,825	1,863	1,936	97%	94%
ヒラメ(養殖)	15	2,247	19	2,096	75%	107%
クロマグロ	4,603	2,513	3,855	2,673	119%	94%
キンギ(キテジ)	856	2,485	700	2,730	122%	91%
アカムツ(ノドグロ)	317	2,835	222	2,771	143%	102%
あまだい類	188	3,185	189	3,216	100%	99%
トラフグ	166	4,113	189	4,134	88%	99%
クルマエビ	13	5,256	22	4,571	57%	115%
イセエビ	119	6,030	152	5,492	78%	110%
あわび類	20	8,042	30	9,455	67%	85%
うに類(剥き身)	71	10,234	67	12,990	106%	79%

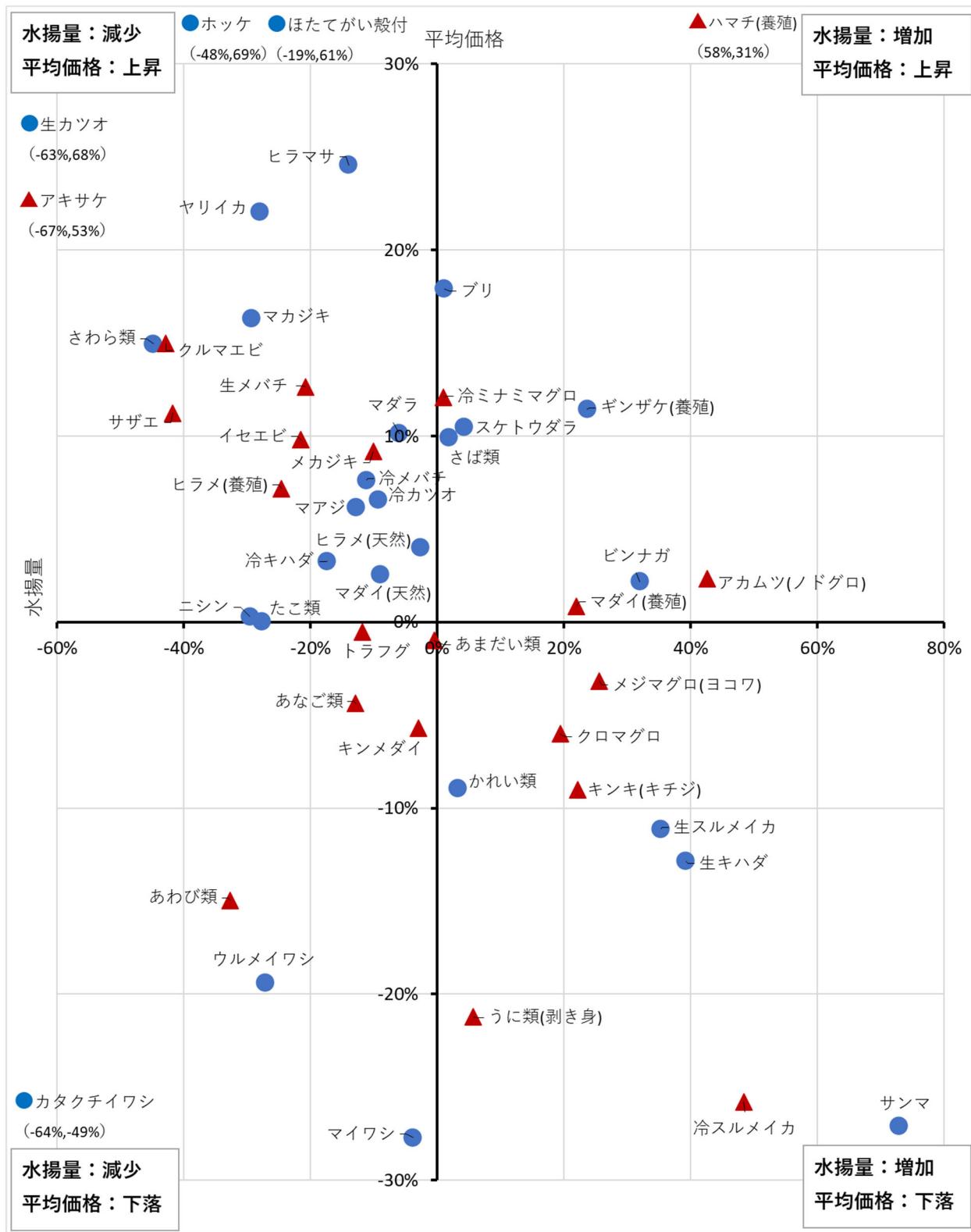


図 6. 主要 49 魚種の水揚量と平均価格の比較(2025 年／2024 年)。横軸と縦軸の目盛に記載した% は、前年比の増減率を示す。▲は 2024 年の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

以上のように、2025 年は、前年よりも水揚量が減少し、価格が前年を上回る魚種が多くなった。全般的には、水揚量の増減にあわせて価格が逆方向に変化する傾向にあったが、水揚量が増加したにもかかわらず、価格が上昇した魚種(ギンザケ(養殖)、ハマチ(養殖))および水揚量が減少したにもかかわらず

価格が下落した魚種(カタクチイワシ、ウルメイワシなど)もみられた。

(3) 産地市場における代表魚種の月別動向

水揚量・価格ともに前年を上回ったハマチ(養殖)と下回ったカタクチイワシについて動向を検討した。

1) ハマチ(養殖)

2025年の累計水揚量は806トンで、前年(510トン)の158%であった。平均価格は1,419円/kgで、前年(1,086円/kg)の131%であった。月別にみると、水揚量は前年同月を上回る月が多く、特に1~7月の増加が顕著であった(図7)。価格は、9月を除き、前年および過去5年平均を大きく上回った。

2) カタクチイワシ

2025年の累計水揚量は5,104トンで、前年(14,038トン)の36%であった。平均価格は40円/kgで、前年(79円/kg)の51%であった。月別にみると、水揚量は年初および春季に前年同月を上回る月がみられたものの、6~7月は前年や過去5年平均の水揚量が顕著に多かったのに対し、2025年は少なかった(図8)。価格は、前年および過去5年平均を下回る月が多く、低水準で推移した。

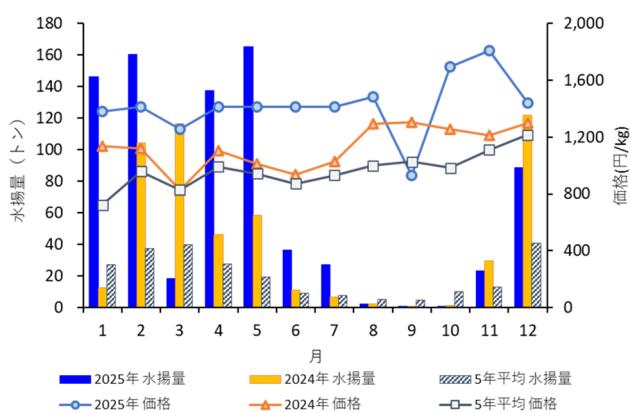


図7. ハマチ(養殖)の水揚量と価格の推移

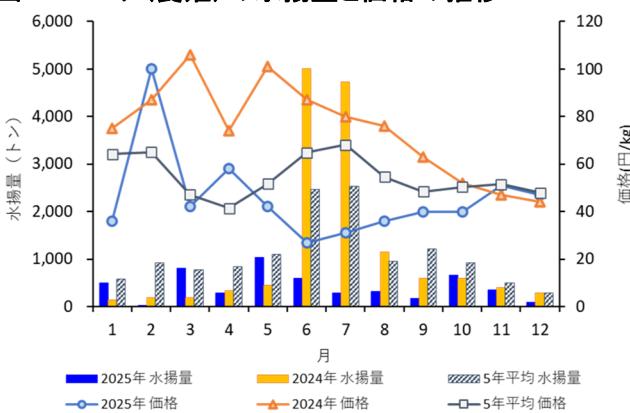


図8. カタクチイワシの水揚量と価格の推移

(4) 東京都中央卸売市場における動向

東京都中央卸売市場の水産物の取扱数量と平均価格を表3に示した。2025年(1~11月)の累計取扱数量は27.0万トンで、前年同期(28.2万トン)の96%。平均価格は1,587円/kgで、前年同期(1,484円/kg)の107%とやや上回った。月別にみると、数量は前年同月並み~下回り、価格は前年同月並み~上回って推移した。

次に、前項で産地市場における動向を比較した、ハマチ(養殖)について、東京都中央卸売市場における動向を検討した。

2025年の累計取扱数量は2,884トンで前年(4,472トン)の64%、平均価格は1,982円/kgで前年(1,369円/kg)の145%であった。月別にみると、数量は年間を通じて前年および過去5年平均を下回り、価格は前年および過去5年平均を上回る高値で推移した(図9)。2025年は、養殖種苗が少なく、海水温が高かったため、在池量が少なかったことに加え、資材や餌などの価格高騰が高値維持の要因となった可能性がある。

表3. 東京都中央卸売市場の2025年の月別取扱数量(トン)と平均価格(円/kg)および前年との比較

月	2025年		2024年		前年対比	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格
1	22,319	1,622	21,510	1,529	104%	106%
2	21,751	1,629	23,860	1,488	91%	109%
3	24,196	1,573	26,700	1,477	91%	106%
4	26,643	1,507	28,133	1,402	95%	107%
5	25,476	1,522	25,924	1,440	98%	106%
6	24,871	1,535	25,950	1,441	96%	107%
7	24,029	1,609	25,517	1,552	94%	104%
8	23,118	1,632	23,949	1,547	97%	105%
9	25,857	1,557	25,363	1,461	102%	107%
10	26,135	1,636	27,801	1,477	94%	111%
11	25,748	1,652	28,087	1,532	92%	108%
合計	270,144	1,587	282,794	1,484	96%	107%

(出典:東京都中央卸売市場 市場統計情報)

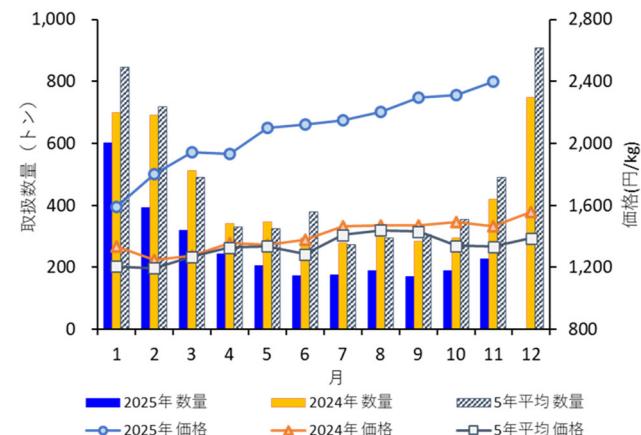


図9. ハマチ(養殖)の取扱数量と価格の推移

(5) まとめ

2025年は、産地市場では、2024年と比較すると水揚量はやや減少し、2010年以降では最低水準であった。価格は前年並みで、2010年以降では最高価格となった。

主要魚種では、前年から水揚量が減少し、価格が上昇した魚種が多かった。一方で、水揚量が増加したにもかかわらず価格が上昇した魚種(ハマチ(養殖))と水揚量が減少したにもかかわらず価格が下落した魚種(カタクチイワシ)もみられた。

一方、東京都中央卸売市場では、取扱数量は前年並み、価格は前年をやや上回った。ハマチ(養殖)

は、産地市場と同様に年間を通じて前年および過去5年平均を上回る高値で推移した。養殖種苗が少なかったことや海水温の上昇による在池量の少なさに加え、資材や餌などの価格高騰が高値維持の要因となった可能性がある。

以上のことから、産地市場と消費地市場ともに魚価の高止まり傾向は継続しており、円安や燃料・資材価格の高騰などが影響していることが示唆される。

(水産情報部 石山なな子)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1)マイワシ・さば類・マアジ

● マイワシ

マイワシの全国主要港における2025年の水揚量は55.8万トン(太平洋側46.8万トン、東シナ海・日本海側9.0万トン)で、前年(58万トン)を約2万トン下回った(図10)。

銚子港では1~8月にまとまった水揚げが継続し、1~12月の水揚量は前年を約7万トン上回った。夏季の好漁の主体は、道東まで大回遊しない群れであり、黒潮大蛇行の解消の影響も考えられる。道東沖では6~10月にまき網船が15.6万トンを水揚したが、前年の20.6万トンを下回った。この原因として、黒潮続流の北偏解消による魚群の北上の遅れや資源量の減少による来湯量の減少に加えて、犬吠海域でのまき網の夏季の好漁が考えられる。犬吠海域の水揚物は体長14~17cm(1~3歳魚)が主体であった。道東海域では体長15~18cm(1~4歳魚)が主体で、体長20cm以上(4歳魚以上)も混じった。

日本海側では3~5月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港での2025年の水揚量は5.1万トンで前年の5.3万トン並みであった。隠岐海峡での水揚物は1~2月は体長13~15cm(1歳魚)が主体であったが、盛漁期の3~5月は16~19cm(1歳魚以上)が主体となった。7月以降は漁獲物に0歳魚も混じった。

価格は全体的に前年・前々年を下回ったものの、10月以降は主体である太平洋側の水揚量が減少したことから、価格は上昇に転じた(図11)。

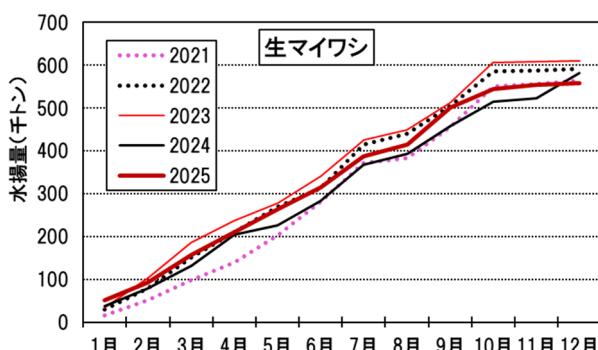


図10. 2021～2025年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

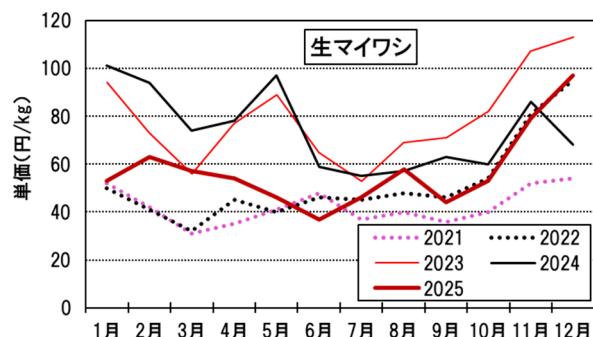


図11. 2021～2025年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における2025年12月末現在の水揚量は22.0万トン(太平洋側4.1万トン、東シナ海・日本海側17.9万トン)で、前年(21.6万トン)並みであった(図12)。

太平洋側では2022年からの不漁が続いており、水揚量は4.1万トンと前年(6.4万トン)を下回った。1~9月にはまき網による水揚げがほとんどなく、10月の銚子港での水揚量は前年を大きく上回ったものの、11月以降、水揚量は下回った。また、体長(尾叉長)30cm以上の南下群はほとんど漁獲されなかつた。これらの要因として、黒潮続流の北偏が解消され南下群が来遊しやすい海況となったものの、資源量減少の影響が大きいと考えられる。

東シナ海・日本海側では、対馬海域を中心によ漁が続いた。遠洋まき網における対馬海域での水揚量は3.4万トンと前年(2.5万トン)を上回った。対馬海域の水揚物は8月以降には体長(尾叉長)28~32cm(1歳魚)主体、11月以降には33cm以上(2歳魚以上)も混じつた。

価格は前年並みで推移したが、11月以降は前年を上回った(図13)。

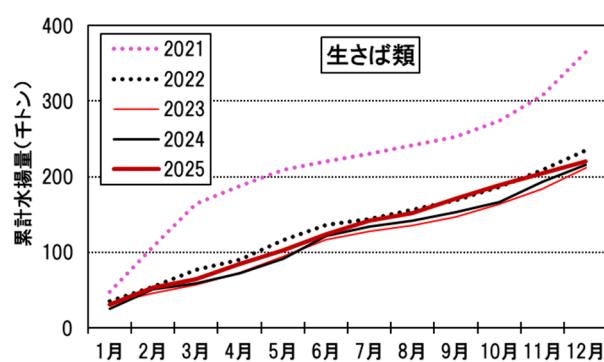


図12. 2021～2025年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

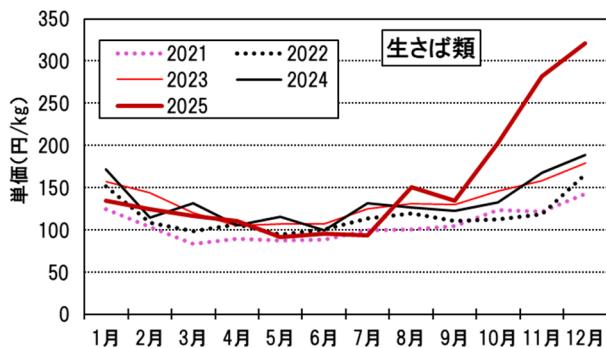


図 13. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

● マアジ

マアジの全国主要港における 2025 年の水揚量は 5.5 万トン(太平洋側 0.6 万トン、東シナ海・日本海側 4.9 万トン)で、前年(6.3 万トン)を下回った(図 14)。境港の水揚量は 0.4 万トンで、前年(0.6 万トン)を下回った。東シナ海側では、5 月に対馬海域で好漁があったものの、1～12 月の遠洋まき網における東シナ海側の水揚量は 1.8 万トンで前年(1.7 万トン)並みであった。価格は前年並みで推移した(図 15)。

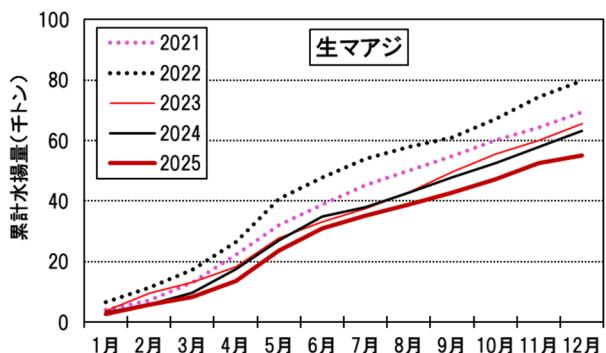


図 14. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

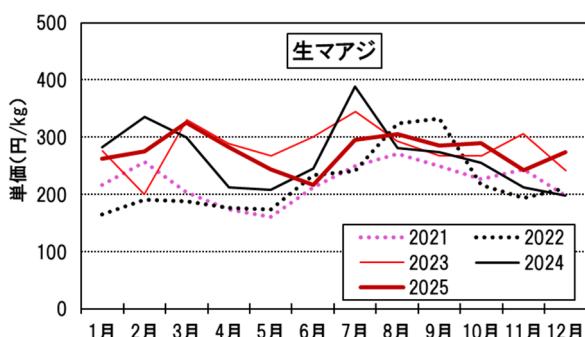


図 15. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

(2)サンマ

2025 年の水揚量は前年を上回って推移した(図 16)。平均単価は前年を下回って推移した(図 17)。12 月末までの累計水揚量は約 6.4 万トンであり、過去 4 年(2021 年～2024 年)を上回ったものの、近年では最も水揚量が多かった 2008 年(約 34.3 万トン)の 18% であった。累計水揚金額は過去 4 年(2021～2024 年)を上回った。

2025 年の漁況の経過は以下のとおりである(漁場は図 18、漁獲物の組成は図 19 参照)。2025 年は、前年に引き続き 8 月 10 日に全船解禁となった。2025 年もロシア主張 EEZ 内での操業開始を 10 月としたことから、初期漁場は前年に引き続き公海であった。

8 月の主漁場は、前年よりも遠く、根室市花咲港の東北東 950～1,600km であった。また 8 月下旬には、道東海域の花咲港～厚岸港の南 40～70km にも漁場が形成された。8 月に道東海域に漁場が形成されたのは 2011 年以来であった。漁獲物は、体長 30～31cm が主体、体重は 120～150g 台が主体であり、200g を越える個体もあった。前年よりも大きく太っており、このように太ったサンマが多く出現したのは 2018 年以来であった。

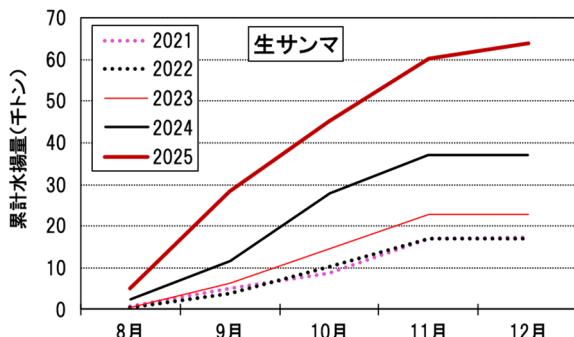


図 16. 生鮮サンマの 2021～2025 年の水揚量の推移

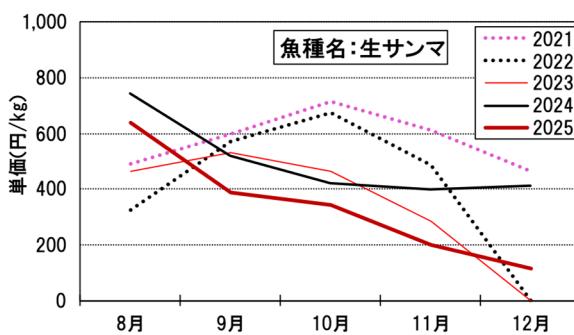


図 17. 生鮮サンマの 2021～2025 年の月別単価の推移

9 月の主漁場は、花咲港の東北東 870～1,050km、花咲港の南南東 400～480km、花咲港の南 260km～厚岸港の南 50km であった。漁獲物は、体長 27～32cm 台が主体、体重 80～120g 台が主体であり、前年よりも大きく太っていた。

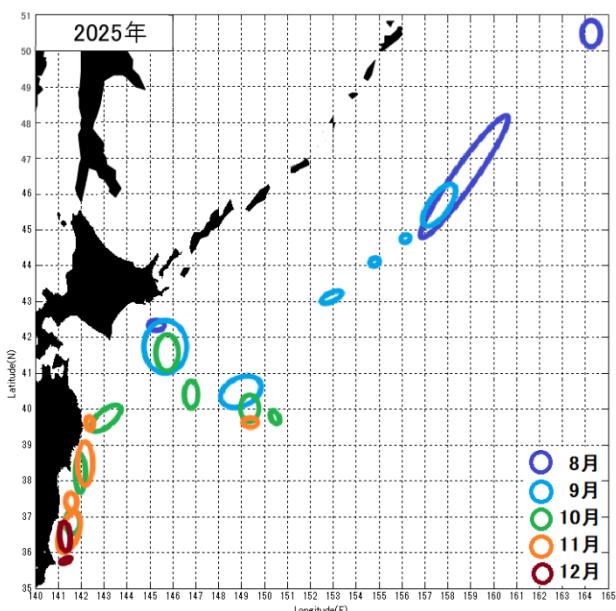


図 18. 2025 年の月別サンマ主漁場

10月になると、漁場は三陸～常磐海域まで南下し、主漁場は花咲港の南 150km～南南東 350 km、花咲港の南 390～600km、久慈港の東 130km～宮古港の東 50 海里、気仙沼港の南東 40km～金華山の南南東 90km、小名浜港の東 60km であった。魚体は 9 月より大きいものが少なくなり、体長は 22～27cm 台と 30～31cm 台が主体、体重は 30～70g 台が主体であった。

11月の主漁場は、花咲港の南東 460～540km、宮古港の南東 40 km～金華山の南 40 km、小名浜港の北東 70km～犬吠埼の北東 20km であった。漁獲物は、体長 23～29cm 台が主体、体重は 60～100g 台が主体であった。常磐海域では、体長 26～31cm 台が主体、体重は 70～140g 台が主体であった。

12月上旬の主漁場は、小名浜港の南 30km～犬吠埼の東 60 km であった。漁獲物は、体長 26～28cm 台が主体、体重は 70～100g 台が主体であった。漁獲量が少なく、12月 7 日夜で操業を切り上げる船が多くなり、12月 9 日が最終の水揚げとなった。

国立研究開発法人水産研究・教育機構が 2025 年 6～7 月に公海域で行ったトロール調査において、東経 165 度以西(1 区)とそれより沖合(2 区)の合計推定分布量は、前年をわずかに上回る程度であった。水揚量がサンマ長期漁海況予報(前年並み)より増加した要因として、海況条件が予想よりも良くなつたことがある。すなわち、8 月は公海域にサンマの適水温が出現し、予想以上にサンマが集まつた。また黒潮大蛇行が終息し、前年よりも黒潮続流の東北沖への北上が弱まり、道東海域および三陸南部～常磐海域の水温が前年より低くなつたことから、魚群の南下が前年より早く、8 月下旬には道東海域、10 月には三陸～常磐海域に魚群が来遊して漁場が形成された。そのため漁場が港から近く、漁場への往復時間が短く、多くの船が操業できた。

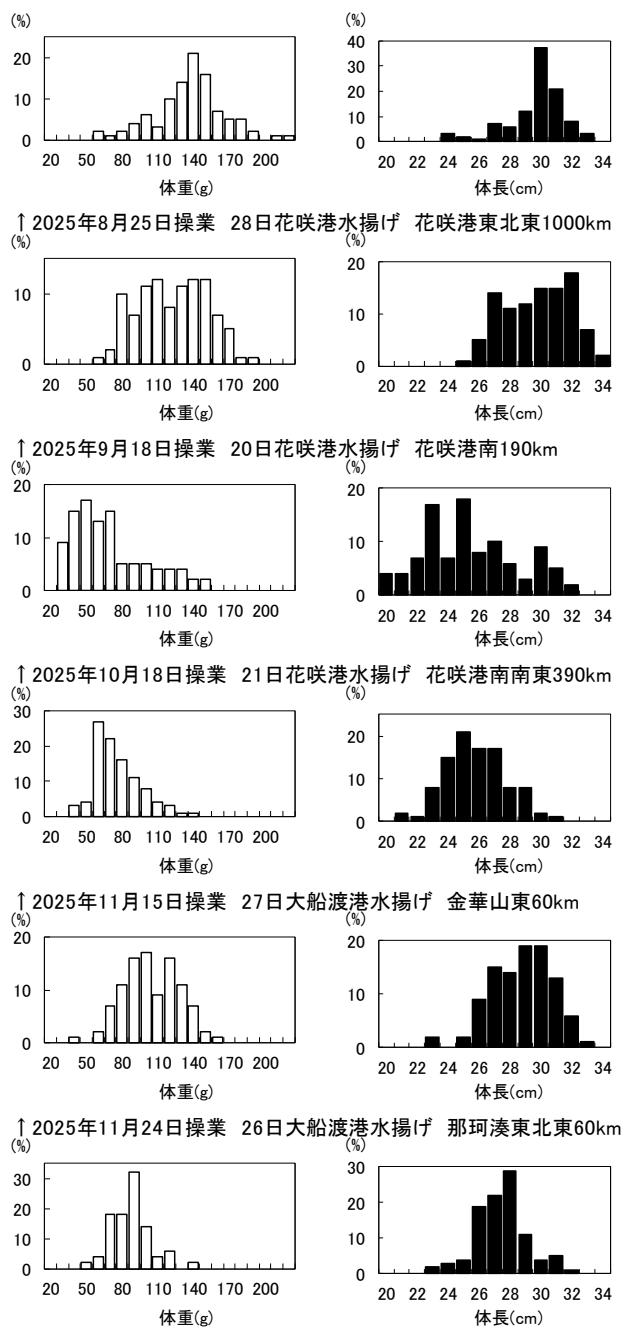


図 19. 2025 年のサンマ体重組成と体長組成

上記調査において、1 区のサンマは太つておらず、2 区では痩せたサンマが分布していた。また 1 区に分布していた 0 歳魚は、前年よりも小さかった。これらの結果を反映して、8～9 月の漁獲物は、上記調査時に 1 区に分布していた群れを漁獲対象として大きく太った個体が多く、10 月以降は 1 区に分布していた 0 歳魚と 2 区に分布していた群れを漁獲対象にして小さい個体が多かつたと考えられる。水揚量が増加したこと、漁期前半に太ったサンマが出現したこと、道東～常磐海域に魚群が来遊して多くの小型船が操業できることなど、明るい材料があつた年となつた。

(水産情報部 渡邊一功)

(3) カツオ・ビンナガ

● カツオ

全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は 1.6 万トンで、前年(3.7 万トン)の 44%、過去 4 年平均(3.4 万トン)の 47% で(図 20)、過去 10 年で最低となった。例年、中型竿釣り船は 7 月以降に東北海域が主漁場となり、漁獲量が増加する。本年も 7~9 月に同海域で操業があったが(トピックス図 44 参照)、著しい不漁となった。このため、宮城県気仙沼港の水揚量は、豊漁だった前年比 18% となり、経済的影響も大きかった。

まき網による生鮮カツオの水揚量は 0.8 万トンで、前年(12.2 万トン)の 7%、過去 4 年平均(12.7 万トン)の 6% で、極めて低調であった(図 22)。まき網によるカツオ水揚量減少の要因は、主な操業海域である中部~北部海域でカツオのまとまった群れが見つからなかったことであった。このため、まき網はキハダ主体に漁獲した。

竿釣りとまき網の状況から、本年は日本近海へのカツオの来遊量が年間を通して少なかったと考えられた。特に盛漁期の夏~秋に東北海域に北上する小型(2~3kg 程度)の群れについては、南方からの来遊がほとんどなかったため、不漁に直接結びついた。

釣りの価格は、年初から 2021 年以降で最も高値水準で推移した(図 21)。全国的に水揚量が少なかったことや、漁場が近かつたために鮮度が良く、値崩れする要因がなかったとみられる。まき網の価格は、かつお・まぐろまき網の盛漁期である 4~9 月は 400 円/kg 以上で、近年を上回る高値で推移した(図 23)。

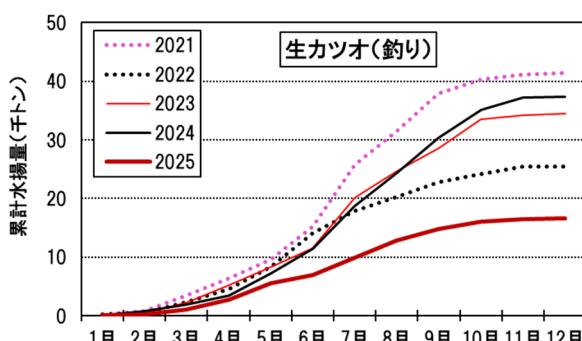


図 20. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別累計水揚量の推移

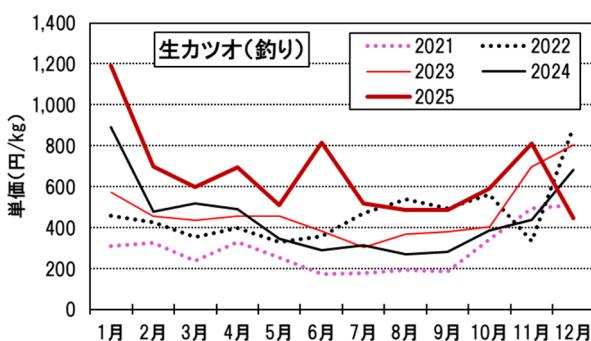


図 21. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別単価の推移

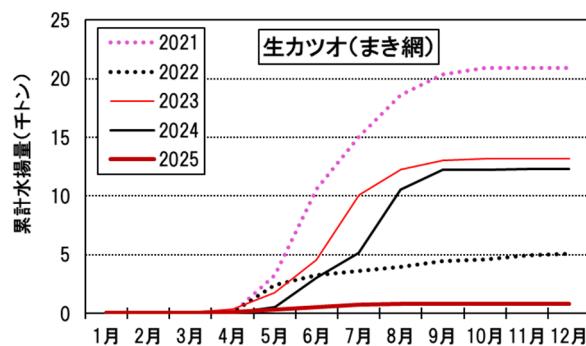


図 22. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

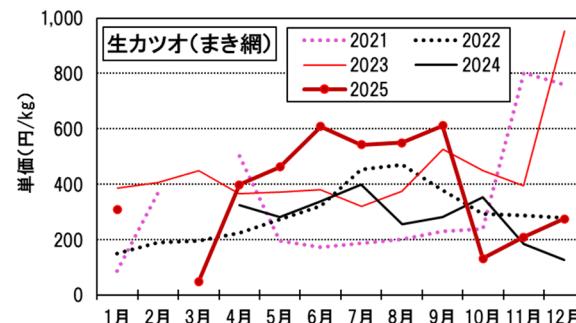


図 23. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

● ビンナガ

全国の生鮮ビンナガ(全漁法)の水揚量は 2.0 万トンで、前年(1.6 万トン)の 132%、過去 4 年平均(1.9 万トン)の 112% であった。(図 24)。生鮮ビンナガの水揚の主体となる中型竿釣り船による漁獲は、5 月中旬から始まり、7 月上旬まで活況が継続した。漁場は例年と同様に、房総南西沖~東北南部沖の黒潮続流やその南側だった。

全国の月別平均価格は 385~908 円/kg で、竿釣りによる漁獲量が増加した 6 月は価格が安くなったり、近年では、水揚量が少なかった 2022 年に次ぐ高値で推移した(図 25)。

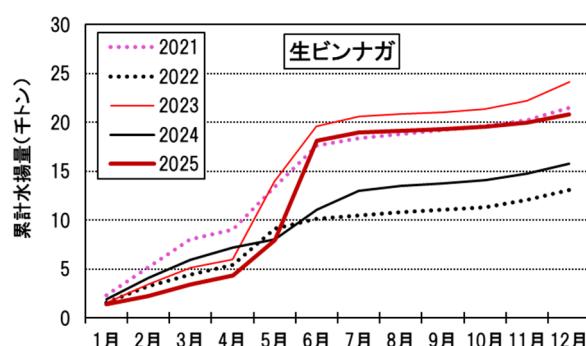


図 24. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

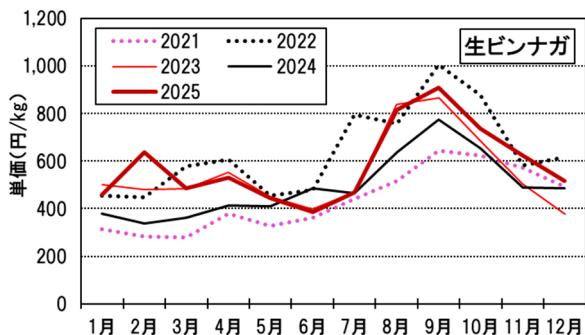


図 25. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(水産情報部 水野紫津葉)

(4)スルメイカ・アカイカ

● 生鮮スルメイカ

本年の全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量は 1.8 万トンと、前年の 1.3 万トンおよび 2021～2024 年平均(1.4 万トン)を上回った(図 26)。これは、冬季発生系群の資源量が増加したことによる。なお、漁獲可能量(TAC)の期中改定が 9 月と 11 月に行われた。また、小型いか釣り(大臣管理区分の 5～30 トン未満船)の TAC が超過したため、10 月 31 日に操業停止命令が発出された。

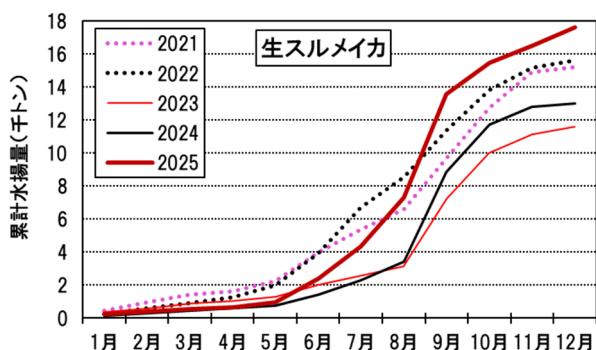


図 26. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

海域別の水揚量は、青森(昼釣り・底曳網主体)、三陸(底曳網主体)および福島～愛媛で前年を上回り、他では前年並み～下回った(図 27)。上述の冬季発生系群の資源量が増加した要因として、親魚量の増加および黒潮大蛇行の解消に伴うスルメイカ幼生の円滑な輸送が指摘されている。¹一方、日本海では高水温が続き、産卵群の南下の遅れもあり、秋季発生系群の資源量は依然として低水準であった。

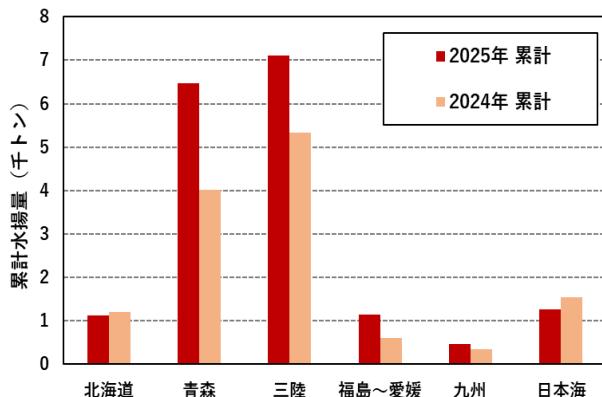


図 27. 2024 年と 2025 年の生鮮スルメイカの海域別水揚量

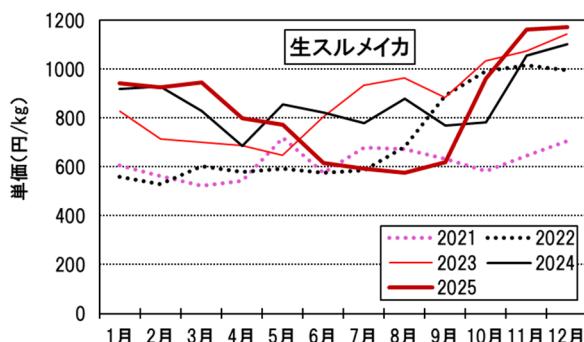


図 28. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

単価は、3～4 月と 10～12 月は前年を上回り、11～12 月は過去 4 年で最高であったが、5～9 月は前年を下回った(図 28)。

● 冷凍スルメイカ

本年の全国主要港における水揚量は 1.6 千トンで、2021～2024 年の平均(3.6 千トン)を大きく下回ったが、前年(1.1 千トン)をやや上回った(図 29)。冷凍(中型)いか釣り船は、従来は 6 月～翌年 2 月に日本海で操業することが多かった。しかし、近年は日本海で漁獲が低調なため、太平洋のアカイカ漁に出漁する船が増えた。また、日本海では本年 6～7 月はほとんどスルメイカが漁獲されなかつたため、7 月後半以降は、小型船の好漁が続いた三陸沖で操業した。一方、アカイカの夏漁に出漁した中型いか釣り船も 8 月から三陸沖のスルメイカ漁に切り替えはじめ、10 月以降は全船が三陸沖で操業した。

¹ <https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/12/FRA-SA2025-SC16-102.pdf>

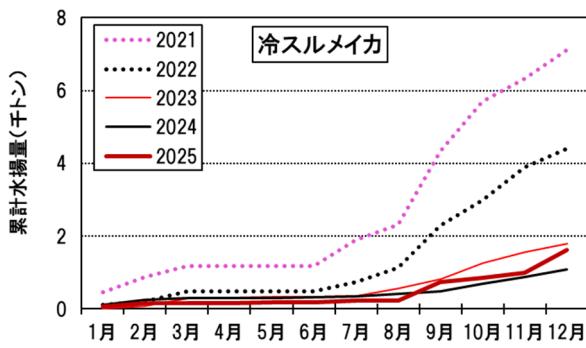


図 29. 2021～2025 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

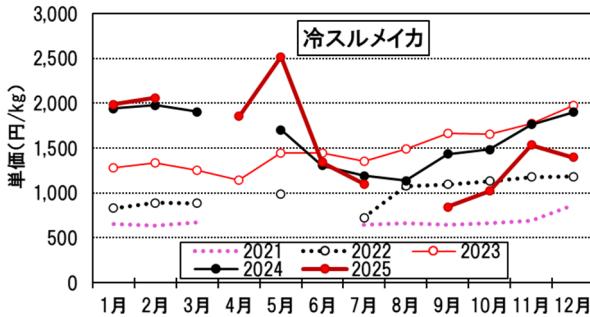


図 30. 2021～2025 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

単価は、前年末以来の高値を維持して1～2月は2,000円/kg前後、5月は一旦上昇したが6月に低下して、1～7月はほぼ前年並みで推移した(図30)。しかし、9月以降は水揚量が増加し、単価は前年を下回った。特に9月は小型が多く、ブロック(ラウンド)の比率が高かったため、単価は大きく下落したが、10月以降はサイズが徐々に大型となりIQF(一本凍結)の比率が高くなつたため上昇した。

(水産情報部 緑川聰)

● アカイカ(ムラサキイカ)

本年の北太平洋におけるアカイカ夏漁(5～9月)の累計水揚量は5.7千トンで、前年(3.8千トン)の150%、過去4年平均(2.9千トン)の170%であった(図31)。水揚港は八戸主体であったが、函館や花咲にも水揚げされた。平均価格は6月に1,037円と高値を付けたが、7月以降は660円～823円/kgで推移した(図32)。本年の平均価格は757円/kgで、前年(718円/kg)並みであった。本年の水揚量と平均価格との関係から算出した総水揚金額は、前年(27.9億円)の1.5倍にあたる43.1億円と推計され、高い水準であった。

アカイカ夏漁に出漁した中型イカ釣り船は29隻、大型イカ釣り船は1隻で、前年より5隻増加した(図33)。これは、近年の日本海のスルメイカ不漁に伴い、石川県小木港を母港とする中型イカ釣り船が出漁したことによる。また、本年は、水産研究・教育機構による不漁対策の一環として、大型サンマ漁船1隻が

アカイカ釣りの兼業試験を実施した。本年も日本海のスルメイカは不漁であったが、9月以降に三陸沖でスルメイカの好漁がみられたことから、アカイカ夏漁は8月末で終漁した。なお、本年もアカイカ夏漁の近海域において中国船の操業が確認された。

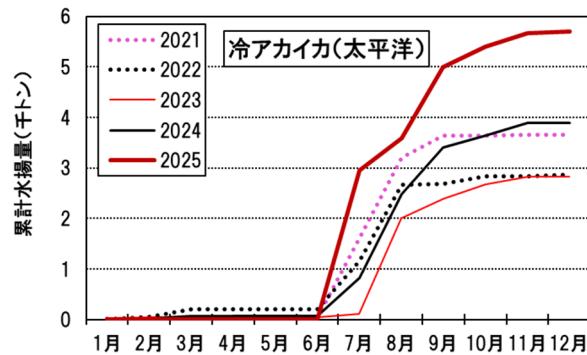


図 31. 冷凍アカイカの 2021 年～2025 年の累計水揚量の推移

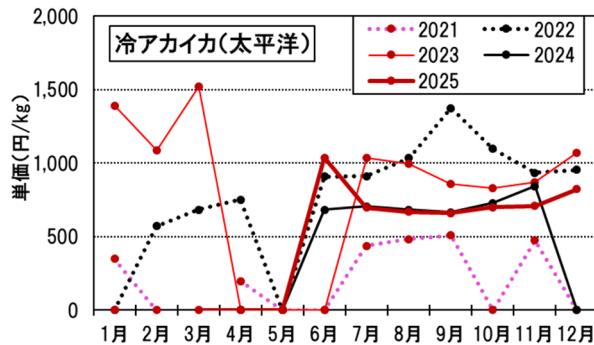


図 32. 冷凍アカイカの 2021 年～2025 年の月別価格の推移

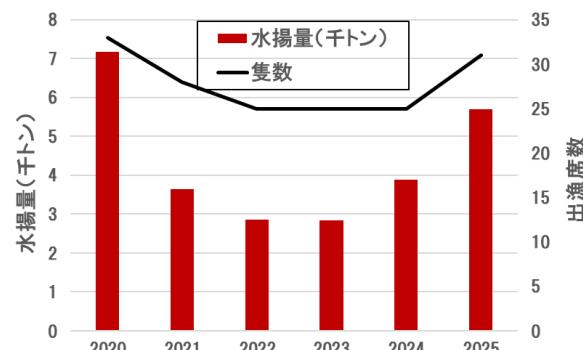


図 33. 2020 年～2025 年の北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5～9 月)の水揚量と出漁隻数の推移

アカイカ夏漁の漁獲対象となる資源水準を示す1日1隻当たり漁獲量(CPUE: 脊肉ケース数/日・隻)は、2020年の137ケース/日・隻をピークに2023年まで減少傾向で推移していたが、2024年以降増加傾向に転じた(図34)。本年のCPUEは148ケース/日・隻で、2011年以降で最も高い水準であった。

近年、海洋熱波の影響と推測されるアカイカ夏漁の平均漁場緯度の北上がみられた。しかし、本年の平均漁場緯度は過去3年と同等であり、顕著な北上は確認されなかったものの、変動幅が大きかった。一方、2020年と比較すると1度以上の差があり、長期的には北上傾向にあると考えられる(図35)。

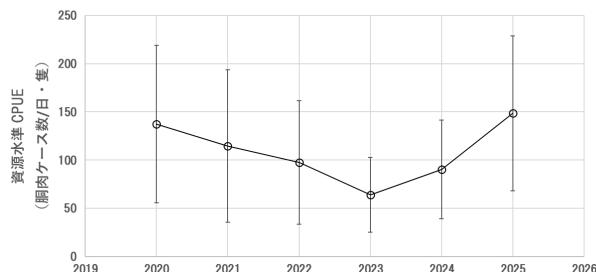


図34. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁の胴肉ケース数でみた資源水準(ケース数/日・隻)の推移(○:平均値、|:標準偏差)

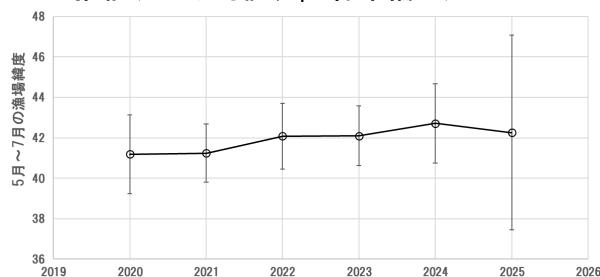


図35. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁の中型イカ釣り船の5～7月の漁場緯度の推移(○:平均値、|:標準偏差)

(海洋事業部 大瀧敬由)

4. トピックス

(黒潮大蛇行終息とその影響)

トピックス1 黒潮大蛇行の終息

2017年8月に発生した黒潮大蛇行は2025年4月に終息し^{2,3}、今回のイベントの継続期間は、1965年以降で過去最長となる7年9ヶ月であった。本トピックスでは、図36に示す2025年1月から大蛇行終了後の9月までの海面高度分布(海面の凸凹)をもとに、2025年前半の黒潮流路とその周辺の海洋変

化を紹介する。なお、図36の見方は、以下のとおりである。

- ・台湾東岸から房総半島沿岸までの青色領域と橙色領域の境に黒潮が位置している(海面高度の変化が大きいところが強い流れである)
- ・円形の等高線域が渦の位置であり、青色は反時計回りの渦(低気圧性渦、冷水渦)、橙色は時計回りの渦(高気圧性渦、暖水渦)である

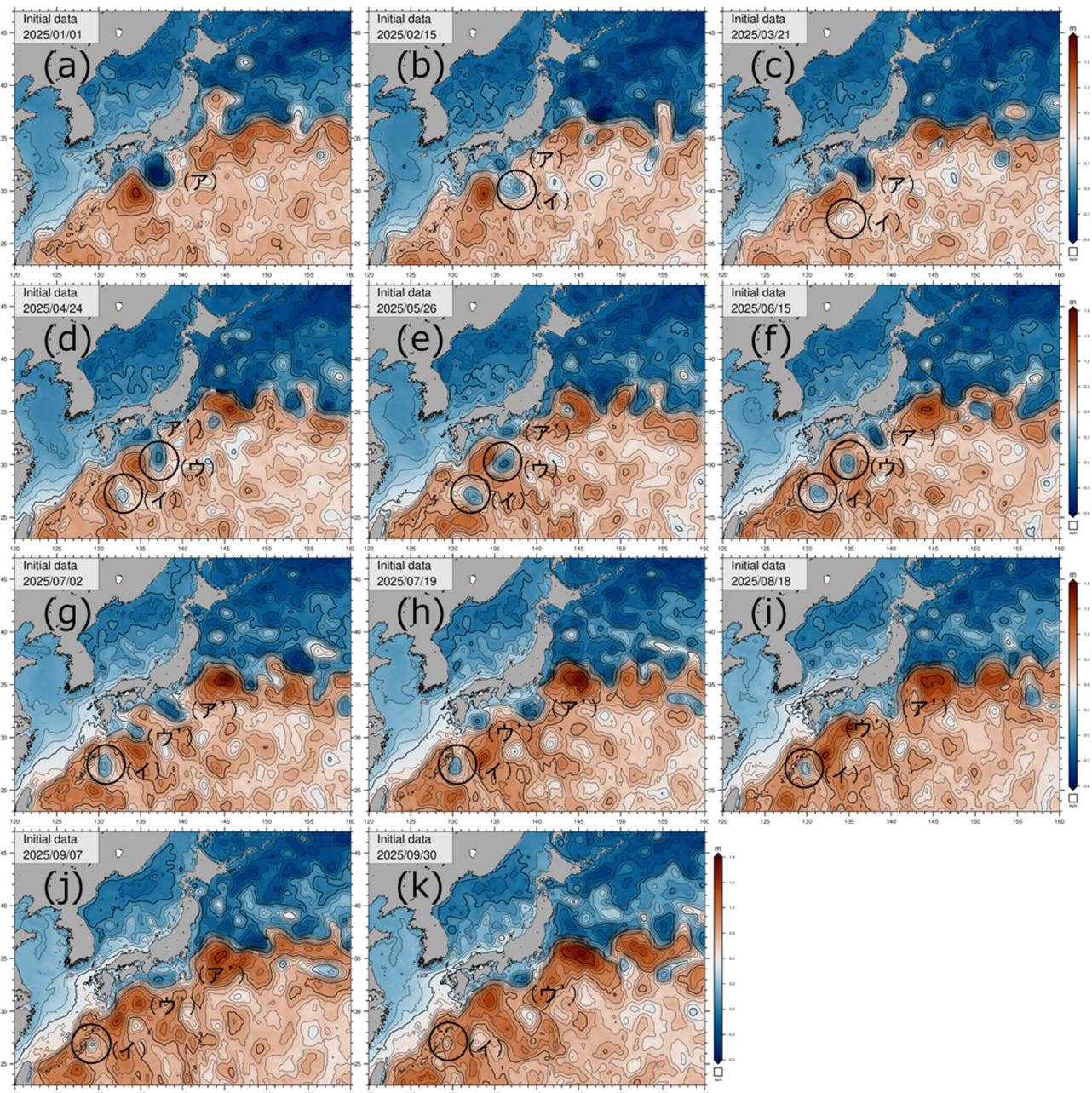


図36. 2025年1月から9月までの日本周辺の海面高度分布
(ア) 黒潮大蛇行の最南下部 (イ) 1回目の切離冷水渦 (ウ) 2回目の切離冷水渦
(ア') 黒潮大蛇行の最南下部だったもの (ウ') 黒潮小蛇行

² https://www.jma.go.jp/jma/press/2508/29a/20250829_end_of_kuroshioLM.html

³ <https://www.kaiho.mlit.go.jp/info/kouhou/post-1236.html>

2025年1月1日(a)において、大蛇行(ア)の終息の兆しは全く見られなかった。2月15日(b)に大蛇行の最南下部から冷水渦(イ)が南へ切離したが、大蛇行の勢力は衰えなかった。切離した冷水渦(イ)は急速に南西へ移動し、渦の中心は、3月21日(c)には $27^{\circ}\text{N}\cdot135^{\circ}\text{E}$ 付近に位置していた。

4月24日(d)、大蛇行から2回目の冷水渦(ウ)の切離が発生した。この時点で蛇行は縮小し(ア')、黒潮流路は大蛇行の定義から外れた。

5月26日(e)に紀伊半島沖に見られた蛇行(ア')は西進し、6月15日(f)において遠州灘沖で南へ大きく蛇行しているが、紀伊半島沖で黒潮が接岸しており、一時的に蛇行が大きくなつたと考えられる。

7月2日(g)、大蛇行から2回目に切離した冷水渦は九州東岸に至り、黒潮に取り込まれて小蛇行(ウ')が発生した。7月19日(h)、黒潮は紀伊半島に接岸しており、黒潮大蛇行の最南下部だったもの(ア')は八丈島の南を通過している。

8月18日(i)の時点では、小蛇行(ウ')の中心は紀伊半島の南に位置し、黒潮の蛇行(ア')は伊豆諸島周辺で大きく蛇行したまま、東進を続いていることが分かる。一方、1回目に切離した冷水渦(イ)は、沖縄本島～奄美大島の東岸に至った後、次第に勢力が弱まっているように見える。

9月7日(j)、黒潮小蛇行(ウ')は紀伊半島を通過し、遠州灘沖で発達の兆しを示している。また、黒潮大蛇行の最南下部だったもの(ア')は、完全に伊豆諸島の東へ至り、その後は黒潮続流域へ流去した。9月30日(k)には黒潮大蛇行の形跡は全くなくなっている。また、1回目に切離し、沖縄・奄美東岸で弱体化していた冷水渦(イ)は、この時点ではっきりと特定できない状態になった。

(生産管理部 日原勉)

トピックス2 黒潮続流の異常な北偏の開始から終息まで

2017年8月に始まった黒潮大蛇行では、遠州灘付近の蛇行部が著しく南下したが、黒潮続流も2023～2024年は著しく北上した(図37)。この異常な北偏は大蛇行の最南下部が西偏した時期に限って見られ、2025年4月の大蛇行の解消に先だって黒潮続流の北偏も終息した。ここでは、黒潮続流の北偏の開始～終息の様子を簡単に紹介する。

2022年後半～2023年前半に黒潮続流の最北部は急激に北上し、 40°N 付近に達した(図37-①)。2024年3月には黒潮続流の北上部が常磐沖で一時に切り離されて南下したが(図37-②)、その直後に再結合して北偏が続いた。5月にも北上部が切り離され(図37-③)、3月とは異なり再結合は起きなかつたが、黒潮続流は接岸しながら再北上し、2024年12月には最北上部が 40°N 付近に達した(図38-(A)、図37-④)。

2024年12月～2025年1月に常磐沖で再び黒潮続流北上部が切り離され(図37-⑤)、巨大な暖水渦(図38-(B)W1)が生じ、黒潮続流の最北部は 36°N

に急激に南下して黒潮続流の北偏は終息した。この暖水渦は、2024年3月の様に黒潮続流に再結合せず、徐々に縮小して勢力が弱まつたが、黒潮続流からの暖水波及や津軽暖流系水の影響を受けながら北上した(図39-(A)W2)。



図 37. 黒潮続流の最北部と、黒潮蛇行の最南下部の緯度の推移

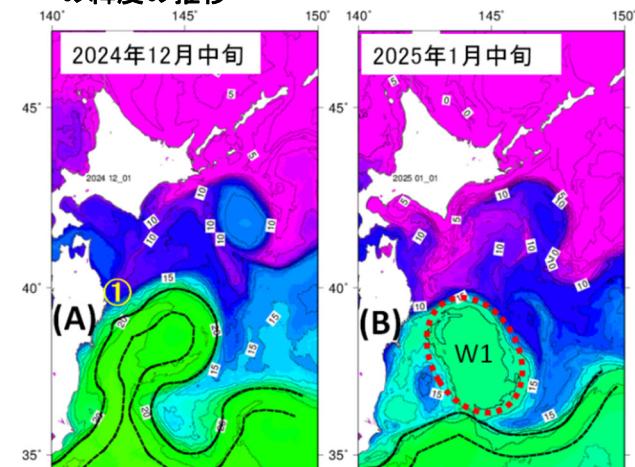


図 38. (A)2024年12月中旬、(B)2025年1月中旬の旬平均海面水温と黒潮続流流路

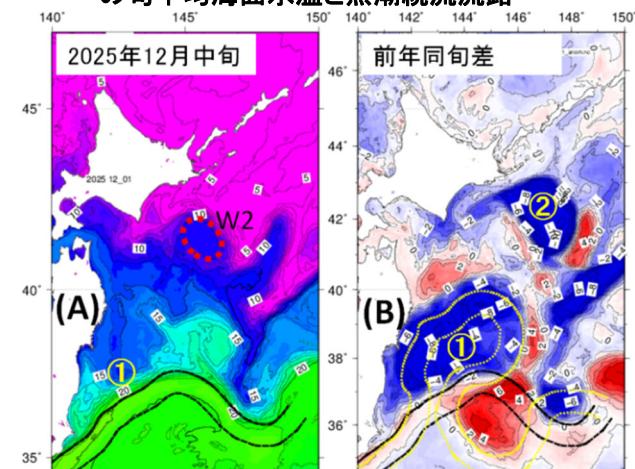


図 39. (A)2025年12月中旬の北部太平洋の旬平均海面水温、(B)2025年12月中旬の海面水温の前年同旬差と黒潮続流流路(黄色破線は前年同旬の流路)

黒潮続流の北偏が終息したため、親潮系水が南下しやすくなり、2024年12月中旬に三陸北部(図

38-(A)-①)に見られた 15°C以下の低温水は、2025 年 12 月中旬には常磐北部沖まで南下した(図 39-(A)-①)。このため、常磐～三陸南部の海面水温は前年の-8～-2°C、道東南東沖でも-8～-2°Cとなった(図 39-(B))。

(海洋事業部 矢野泰隆)

トピックス3 マイワシとさば類への影響

2025 年 4 月に黒潮大蛇行が終息し、黒潮続流の異常北偏も解消した(トピックス 1、2)。それらの水産資源への影響が様々に報道されている。ここでは、マイワシとさば類(主にマサバ)太平洋系群の主要漁場である常磐～三陸海域における水温変動と漁況への影響を紹介する。なお、水揚量は JAFIC おさかなひろば、水温は気象庁 COBESST を用いた。

これらの系群は、冬春季に主に関東以南の太平洋で産卵し、夏季に三陸北部～道東海域以北に北上するが、近年の温暖化(海洋熱波の頻発を含む)により、北上回遊が早期化し、産卵場や越冬場が北寄りにシフトしている。また、近年の資源量は、マイワシでは高水準だが微減、マサバは急減した。

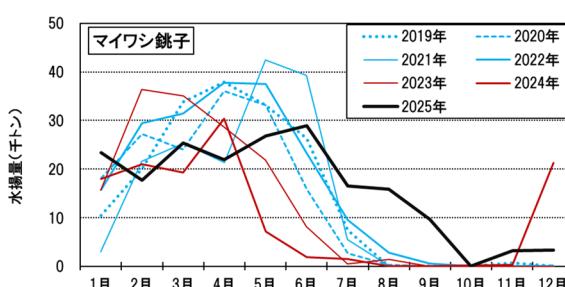


図 40. 2019～2025 年の銚子港におけるマイワシの月別水揚量の推移

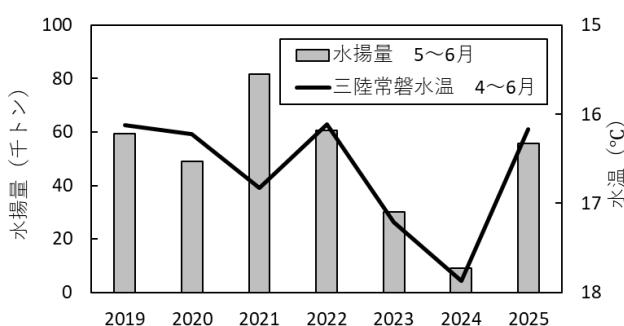


図 41. 2019～2025 年 5～6 月の銚子港におけるマイワシ水揚量と 4～6 月の三陸南部～常磐沖の平均海面水温の推移 水温の軸は反転している

主要水揚港である銚子におけるマイワシの主な水揚時期は 1～6 月であるが、黒潮続流が異常に北偏した 2023 年と 2024 年には、常磐～三陸の水温上昇に伴い、5～6 月の水揚量が減少し、近年の北上の

早期化がいっそう顕著になった(図 40、41)。2025 年には黒潮続流の北偏解消により、春季水温が 2022 年以前並みとなり、銚子の春の水揚量も回復したことから(図 41)、回遊パターンも 2022 年以前に戻ったと考えられる。しかし、銚子近海での好漁は、例年になく 8～9 月に継続した(図 40)。この夏季の好漁をもたらしたのは、「入梅イワシ」と呼ばれる、三陸や道東に北上しない小回遊群と思われる。「入梅イワシ」の大量来遊は、黒潮大蛇行の終息に伴い、銚子近海よりも西側の沿岸海域からの回遊に適した海況となつたことが原因かもしれない。

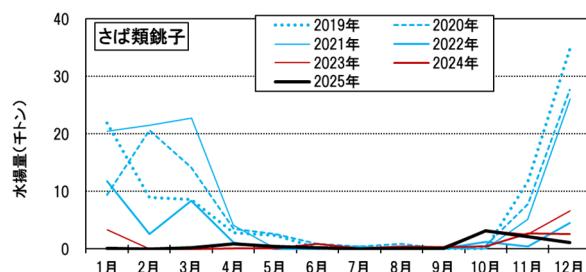


図 42. 2019～2025 年の銚子港におけるさば類の月別水揚量の推移

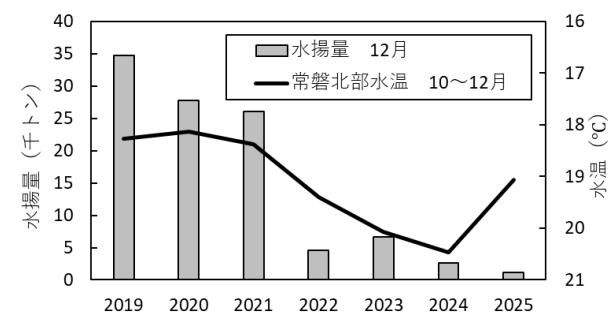


図 43. 2019～2025 年 12 月の銚子港におけるさば類水揚量と 10～12 月の常磐北部沖の平均海面水温の推移 水温の軸は反転している

銚子港のさば類の主な水揚時期は 12～3 月であるが、この時期の水揚量は 2019 年以来徐々に減少した(図 42)。特に、2023 年以降の 1～3 月にはほとんど水揚げがなく、2025 年に黒潮続流の北偏と高水温が解消されたのに、水揚量が回復していない。12 月の水揚量も、2022 年に水温が上昇してから、低調なままである(図 43)。近年のマサバ不漁の主な原因の仮説として、水産研究・教育機構⁴は高水温と強い漁獲圧(外国船を含む)などによる資源量の減少と回遊の変化を挙げている。

このように、2025 年の黒潮大蛇行と黒潮続流北偏の解消後、マイワシは「元に戻った」が、さば類はそうではなかった。海洋環境の変動は、短期的な漁場形成や魚群の回遊に影響するのみならず、魚種・系

⁴https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/etc/files/masa_furyou_20251111.pdf

群の成長・成熟・加入量にも深く関係し、この影響は長期に及ぶ。特に、海洋の温暖化は、マイワシやマサバの産卵場や生育場である黒潮域や移行域（黒潮と親潮の間）の餌生物にとって負の影響が大きいといわれる。

冬季の三陸常磐沖は、マサバが産卵のために南下して好漁場となってきたが、2025年末～2026年初は1歳魚が主体となっており、成魚サイズ（尾叉長30cm以上）は希である。マサバ資源量は低水準としても、成魚はどこかを泳いでいるはずである。黒潮大蛇行の終息により、マサバの主産卵場である伊豆諸島北部海域の水温は「元に戻る」ことが期待され、同海域で操業する今春のマサバたもすくい網漁業の動向が注目される。

（水産情報部 谷津明彦・源 浩輔）

トピックス4 カツオへの影響

2025年初に黒潮続流の異常北偏が解消し（トピックス2）、生鮮カツオにはどのような影響があつただろうか。

・カツオの漁場形成

生鮮カツオの主な漁法である、中型竿釣りとかつおまぐろまき網は、常磐～東北海域において、6～10月に盛漁期を迎える。カツオは南方から北上して日本近海に来遊するため、カツオ漁場は暖水の分布と重なることが多い。特に、黒潮続流の北偏が発生した2023～2024年は、この暖水の影響で東北海域では沿岸寄りに漁場が形成され、豊漁となった。

2025年についても、中型竿釣り船の漁場は、7月中旬頃から北緯35°N以北の常磐～東北海域においてカツオ主体に形成された（図44）。しかし、この海域における年間の延操業隻数は510隻にとどまり、2024年以前より大幅に少なかった（表1）。カツオの漁獲量が低迷したこと、盛漁期にもかかわらず、伊豆諸島や九州周辺などに移動して操業する船もある異例の年だった（聞き取りによる）。生鮮カツオの水揚げ主要港である宮城県気仙沼港では、2025年の生鮮カツオ（釣りによる）の水揚量は4千トンで、豊漁だった2024年の18%、過去4年平均の25%となり、この大不漁は気仙沼の経済にも打撃があったことが報道された。

このように、2025年は東北海域が著しい不漁であったため、関係各所から「黒潮続流北偏の解消が要因ではないか」といった問い合わせがあった。しかし、暖水が北上しなかったことだけが要因であるとは考えにくい。なぜなら、東北海域の海況は、2022年以前に戻りつつあるにもかかわらず、なぜカツオが以前のように漁獲できなかつたのだろうか。

・不漁の要因は全国的な来遊量減少

では、東北海域の海況は黒潮続流北偏以前に戻りつつあるにもかかわらず、なぜカツオが以前のように漁獲できなかつたのだろうか。

ここで、黒潮続流北偏の影響を受けない、伊豆諸島以西のカツオの水揚量に注目してみると、鹿児島は3.5千トンで、前年比77%、過去4年平均比52%だった。愛媛県愛南は1.4千トンで、前年比54%、過去4年平均比79%、静岡県御前崎は380トンで、前年比62%、過去4年平均比41%だった。つまり、中部～西日本における生鮮カツオの水揚量も、いずれも低水準であったのだ。このことから、2025年は日本周辺全般でカツオの来遊量が少なかつたと考えられる。

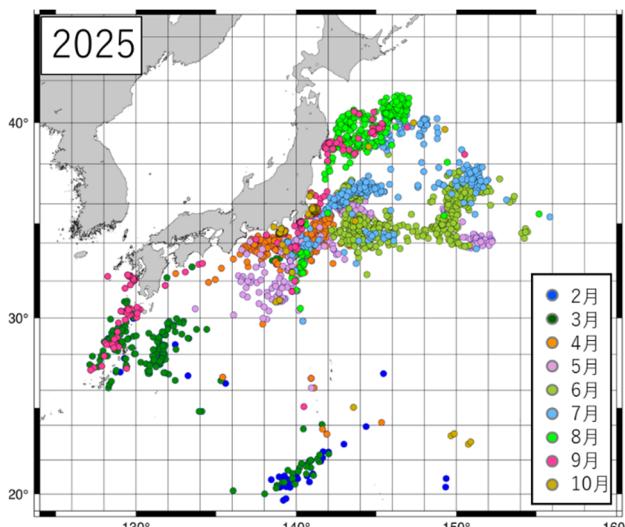


図44. 2025年2～10月の中型竿釣り船の漁場（情報収集海域全体）※1、11、12月の漁場情報は無し

表4. 2020～2025年の35°N以北における中型竿釣り船の延操業隻数

年	延隻数
2020	2,224
2021	2,732
2022	1,482
2023	2,440
2024	2,586
2025	510

・近年の不漁年との比較

日本近海に来遊するカツオの主分布域は南方の熱帯～亜熱帯海域であり、周年産卵している。その一部が日本近海へ来遊するが、日本近海におけるカツオの分布域は体サイズによって異なることが知られており、東北海域へ来遊する主群は満1歳～1歳半程度（秋季に2～3kg程度）で、未成熟の個体が餌を求めて海面水温20°C以下の海域に北上する。この海域で脂乗りがよくなり、南へ帰っていく群れが、秋の「戻り鰹」である。

近年、この主群の来遊が少ない年があり（2020年、2022年）、その場合は不漁となり、大型カツオ（秋季

に 4kg 以上)が多く水揚げされた(図 45)。この大型カツオの群れは、海面水温 24°C 前後の海域で主に漁獲され、20°C 前後の混合域の分布は少ない。このため、大型カツオが主体となると、東北海域では豊漁となりにくい。2020 年と 2022 年は、「いつもの群れがないので、大きいカツオを漁獲した」という年だった。一方、2025 年は、相対的には主群が比較的多いが、そもそも来遊量が少なく、大型カツオも少なかつたため、「いつもの群れもないし、大きいカツオもない」といった状況で、2020 年や 2022 年とは異なる様相の不漁年となつた。

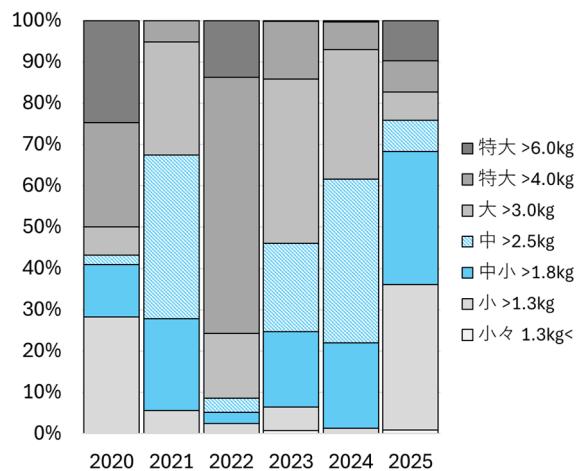


図 45. 2020～2025 年の気仙沼港における生鮮カツオのサイズ別水揚量の割合(中、中小が秋季の主群)

・まとめ

2025 年初の黒潮続流の異常北偏の解消は、東北海域のカツオ漁場形成の好条件ではなかったものの、カツオの不漁は全体的な来遊量減少の影響が大きかったと考えられた。カツオの漁場は、様々な要因が複合的に絡み合って遷移している。海況は大きな要因の 1 つだが、来遊するカツオのサイズごとの性質の違いによる分布域の違い、竿釣りの場合は餌イワシの入手事情、漁船の探索能力や、陸上の受け入れ態勢、産地価格などが挙げられる。黒潮大蛇行の終息と黒潮続流の異常北偏が解消されたことで東北海域の海況は以前に戻りつつあるが、様々な要因により、漁獲や水揚量が以前のように戻るとは限らない。2026 年は、例年の主群の来遊量の多寡や、東北海域の暖水の分布が鍵になる。春先の小笠原周辺の小型魚の出現や海況を引き続き注視していく。

(水産情報部 水野紫津葉)